

移行期における中学校部活動の実態と課題に関する 教育社会学的考察

—全国7都県調査の分析をもとに—

比較教育社会学コース 西 島 央
上越教育大学 藤 田 武 志
大妻女子大学 矢 野 博 之
比較教育社会学コース 荒 川 英 央

A Sociological Study of Club Activities in Junior High Schools on Transition:
Based on a Questionnaire Survey in six prefectures and the Tokyo metropolitan area

Hiroshi NISHIJIMA, Takeshi FUJITA, Hiroshi YANO, Hideo ARAKAWA

In our previous research, we have tried to illuminate the factors that affect secondary school students' commitment to their schools and the planning of their future education and career, by examining how they have been involved in the school's club activities. In doing so, we proposed "a plural model of school culture." We are convinced it is now the time for education in Japan to renovate its fundamental nature. The new national curriculum (course of study) which is coming into force from April 2002 may prove to be one of the most concrete examples of this change. This has led us to carry out a series of research surveys that will show what sort of effect the new national curriculum will have on the students' school life, especially on the club activities.

The purpose of this paper is to construct a hypothetical analysis in order to prepare a survey for use in the reinvestigation of the matter in 2004, and to propose the agenda for schooling which should take account of what form club activities should take in the future. Our methodology has comprised the analysis of questionnaires collected from 4000 students in six different prefectures and the Tokyo metropolitan area in March 2001.

More precisely, in this paper we have examined four questions.

1. Dividing the students into four clusters based on the differing levels of commitment, we aim to develop a plural model of school culture by discussing the relationships between students' differentiation and the clusters. 2. Considering the students' attitudes towards their clubs, we aim to clarify the process by which students build relationships among their peers through club activities. 3. Focusing on the students' experiences before entering junior high school, we examine how their family backgrounds may have influenced their commitment to club-activities. 4. We examine students' responses to the changes in school education and discuss the questions of what constitutes the most pressing issue in school education in order to explore what club-activities ought to be in future.

目 次

		(藤田武志)
	II 調査の概要と調査対象校・対象者の特徴	
		(荒川英央)
I 本稿の課題とその背景	A 調査の概要	
A はじめに	B 調査対象校・対象者の特徴	
	III 学校生活と生徒の分化	
B 学校教育に対する部活動の位置づけの経緯	(藤田武志)	
	A 学校生活諸場面に対する生徒のコミットメ	
C 教育改革の動きとクラブ活動・部活動		
		(西島 央)
		(矢野博之)

- ント
- B コミットメントクラスターと生徒の分化
- C 本章のまとめと考察
- IV 部活動における生徒の友人関係
(矢野博之)
- A 問題の所在
- B 分析の視点と手づき
- C 学校コミットメントのちがいをからみる、部活意識と部活仲間志向の関係
- D コミットメントクラスターからみる部活仲間志向の相違の含意
- E 部活以外の仲間関係による考察
- F まとめと課題
- V 部活動とスポーツ・文化的活動の機会—出身家庭に係る条件に注目して— (荒川英央)
- A はじめに
- B 部活動への関わり・コミットメント
- C スポーツ・文化的活動の機会を提供する学校教育
- D まとめ
- VI 移行期における部活動に対する生徒の意向と学校教育の課題 (西島 央)
- A はじめに
- B 部活動改革とその論点
- C 分析枠組み
- D 分析結果
- E 部活動の移行期にあたっての学校教育の課題
- VII おわりに (西島 央)

I 本稿の課題とその背景

A はじめに

われわれ研究グループ¹⁾は、これまで、生徒の部活動への関わりを通して、彼らの学校へのコミットメントや進路選択などのさまざまなパターンの様子を明らかにし、その分化の規定因を探ろうと試みてきた。その作業を通して、従来の学校社会学が描いてきたトラッキング・パースペクティブに基づく学業成績中心の学校文化モデル²⁾に対して、多元的学校文化モデルという捉え方をすべきではないかという考え方を仮説的に提出した(西島他 1999)。そのモデルを仮説的に生成し、実証的に検証していくために、とくに中学校段階の部活動に注目して調査研究を進めてきている。

中学校段階に注目する理由は次のとおりである。従来の学校社会学は、生徒の学業面でのグルーピングが

制度的組織的に存在する高校段階中心に研究が進められており、高校間格差がトラッキングシステムとしての硬直性を増すに連れて、選抜・配分機能がより下の学校段階へ移行するという論理で、中学校段階の生徒の分化は検討されてきた。しかし、中学校に学業面でのグルーピングが制度的組織的に存在しないならば、中学校段階独自の論理で生徒の分化の過程やその規定因を明らかにする必要があると考えるからである。

一方、部活動に注目する理由は、以下の5点である。第一に、多くの中学生にとって部活動は、学校生活にとどまらず日常生活においても大きな位置を占めている。第二に、教師側からみたとき、部活動は生徒指導の重要な手段のひとつと位置づけられていることが多い。第三に、学業成績によるグルーピングが基本的に存在しない公立中学校において、部活動の関わり方には、組織的な差異、加入・不加入、活動実績、参加の度合いといった差異が存在している。第四に、とくに推薦入学制度の拡大に伴って、学業成績以外の評価対象の比重が大きくなってきており、部活動での実績も進学・就職の際の評価の基準のひとつになっている。第五に、部活動が教育課程外の活動であり、異年齢集団を形成したり学校外の集団と関わりをもったりするため、授業中心の教室空間や学級以外の空間や社会集団を考慮に入れることができる。このように多様な特徴や幅広いつながりをもつ部活動に、中学生がどのように関わっているかを明らかにすることで、より多面的に中学生の分化の様相を捉えることができると考えるからである。

これまでに実施した調査は次の2つである。第一に、1999年2～3月に東京都23区内の公立中学校6校の2年生912名を対象に質問紙調査を実施した。(以下、「98年度調査」と表記。)第二に、98年度調査対象校のうちの1校で、1999年4月から2000年3月にかけて総計52回の観察調査と1人あたり2回ずつのインタビュー調査を実施した。(以下、「観察調査」と表記。)主な調査対象者は柔道部の3年生部員8名で、彼らは98年度調査の対象者でもある。なお、この観察調査は断続的ながら2000年4月以降も継続している。

これらの調査から得られた知見は、①生徒文化と進路選択の分化には学業成績ばかりでなく、運動能力といった軸が存在していること、②部活動での友人関係に重きをおく集団である部活仲間が、生徒の分化を生み出す小集団として機能していること、③部活動が、スポーツ・文化的活動への関わりにみられる家庭環境による差異を軽減している可能性があること、④運動

能力や運動することが、男女のジェンダー形成において異なる意味をもっていること、⑤中学生にとっての部活動の効用は、彼らが学校文化のどの側面を重視しているかによって異なり、学校に価値観や規範が多元的に存在していると示唆できること、⑥同じ部活動に参加し、一定以上の実績をあげていても、学校の諸場面への重視のしかたが違うことで、部活観から学校生活観や進路選択まで多様であること、⑦中学生が部活動に求めているものの違いから、部活動の活動内容を志向する生徒と、部活動を自分の学校でやることを志向する生徒が存在することなど、多岐にわたっており、それらの成果は、西島他(1999)、西島他(2000)、羽田野(2000)、藤田(2001)にまとめられている。

ところで、中学校では2002年度から完全実施される新教育課程では、これまで長く特別活動の内容のひとつだったクラブ活動が廃止される。廃止の理由のひとつとして、教育課程外の部活動の充実が挙げられているが、クラブ活動を部活代替によって行ってきた中学校は非常に多く、クラブ活動が廃止された場合、今までどおり部活動が行われるとは限らない。また、少子化の影響や学社融合の動きなども相俟って、これからの数年間は、部活動のあり方が大きく変わっていく移行期になるとみることができよう。移行期という点では、学校教育そのものもまた今日、完全学校週5日制の導入、総合的な学習の時間の設置、学習内容の3割削減にみられるように、戦後教育改革期以来の大きな移行期にあるといえよう。

そのように考えると、部活動の移行期にあたっての方向性やその功罪については、これまでのところ主に活動そのものや生徒指導の観点から論じられているが、そればかりでなく、学校教育と社会との関係をもふまえて、教育社会学の観点からもさまざまな論点が指摘されうるのではないだろうか。また、この移行期を経て生徒の学校への関わり方に変化がみられるとしたら、多元的学校文化モデルの検証にもつながりうるだろう。

そこでわれわれ研究グループは、新教育課程完全実施前後で中学生の学校生活にどのような違いがみられるかを、部活動への関わりを通して比較検討する調査を新たに企画した。

本稿では、2001年3月に7都県約4,000名の中学生を対象に実施した質問紙調査データの社会学的な考察から、第一に、3年後に実施予定の質問紙調査と比較検討していくために、学校文化、友人関係、家庭環境といったトピックを取り上げて生徒の分化の規定因を探

る仮説生成的な分析を行うことを、第二に、部活動の移行期にあたって検討すべき学校教育の課題を提出することを目的とする。

B 学校教育に対する部活動の位置づけの経緯

本稿の主題となる部活動と2002年度の教育課程の変革について、学習指導要領での位置づけの変遷を中心に、学校教育に対する現在までの部活動の位置づけを歴史的に概観しておこう。

スポーツや文化活動など、学校教科を越えた、生徒の興味・関心を主題とした活動が、現行の教育課程に組み込まれた嚆矢は、戦後新教育下の教科外活動としての「クラブ活動」である。戦前までのそのような活動は、明治期から、学生の任意かつ自然発生的な活動が、学校側の教育課程と接近しつつ共存してきた経緯がある。我々が本稿で主にとりあつかう「部活動」は、実態は盛んながら、教育課程外の活動として教育課程(学習指導要領を指すものとする)には位置づけられず、その関係性も示されてこなかった歴史が長い。その教育的意義が付与され、教育課程との関係の上にかに位置づけるか試みてきた歴史が、クラブ活動の制度的変遷の経緯であったと読みとることができる。

1947(昭和22)年、クラブ活動は、戦後新教育体制のもと、学習指導要領において、小学4年次以上の「自由研究」という選択教科の一つに設置される。ただしこれは、主に教科学習について時間割枠内の学習時間を時間割の枠外にまで発展させた自主学習を主旨とした活動であったという点で、現在に至っているクラブ活動や部活動とは性格を異にする。その後、昭和26(1951)年版指導要領において、教科から「領域」と称される位置づけに変わり、クラブ活動は「特別活動」という領域内に組みこまれた。さらに、昭和33(1958)年版では、小中高ともに「特別教育活動」と改称された領域に位置づけられ、その活動内容が具体的に指導要領上に解説されることとなった。これにより、教科外活動が、学校管理下に置かれる色合いが明示的となった。

こうして実態としての教科外活動は、一旦クラブ活動という形で教育課程内に位置づけられる方向で進展したが、その一方でいわゆる部活動という課程外活動は、東京オリンピックをひとつのピークとした対外競技の加熱にみられるような問題性をはらみつつも盛況となっていった。いよいよ、現教育体制に至るまでの、クラブ活動・部活動の基本枠組みを成したのが昭和43(1968)年版である。小学校においては、週1時間4年生以上全員参加の「必修クラブ」が設置され、中・

高においては「必修クラブ」(課内クラブ)と「選択クラブ」(いわゆる放課後の『部活動』)とに二分された(中学・昭和44年版, 高校・昭和45年版)。その後三十年間にわたり現在まで、課程内の「クラブ活動」と、放課後の課外活動である「部活動」とが共存してきた。部活動の実態は、高校野球その他のスポーツを中心としたその隆盛にみられるように、脈々と学校生活のなかにその存在感を示しながらも、学習指導要領上の文言に示されることはなかった。その解説や制度的規制がないまま、暗黙裏に、生徒の主体的な希望参加活動を学校側が実質的に計画し責任下に置く、という慣習的体制のまま活発に行われつづけてきた。

このような部活動の隆盛と充実ぶりを背景として、平成元(1989)年版において、いわゆる「ゆとり教育」に代表される学校運営に対する当代的な配慮から、部活動への参加をもってクラブ活動の履修に替えられる「部活代替措置」が認められた。この件で、はじめて部活動が指導要領上で言及された。この代替措置により、時間割枠内からクラブ活動が姿を消した学校も少なくはない。その後約十年間、可能な限りの全員加入を前提とした、部活動としての課外活動体制が日本中の少なからぬ学校で採用されていった。そして今回の改訂において、部活動の成熟や社会教育へ参加者の増加といった実状をふまえての「学校スリム化論」を基調として、部活代替制は廃止され、必修クラブは指導要領上から消え去ることとなった³⁾。

このように、クラブ活動の経緯は、戦後、生徒個別の教科学習の延長時間的位置づけから、全員必修制の課内活動へ変わり、そして部活代替制へ、さらに今回の改訂によって中学・高校における廃止へとたどってきた。その一方で、生徒の教育課程外の活動という実態の視点からふりかえれば、ときにクラブ活動と名を替え、あるいは併存しつつ、明治期より脈々と生徒による主体的活動を大義名分として、学校教育の一環として存在してきたのである。教育課程外であるがゆえに、その教育的意義は主に学校関係者のなかで付与されてきたものであったが、それを越えて社会的に読みとれるような機能をも果たしてきたと考えられる。今移行期では、部活動の概念を問い直しかねないほど、学校・生徒をとりまく状況の変化の影響が現れる可能性が大きいがゆえに、今回われわれが試みるアプローチが意味を持つと考える。

C 教育改革の動きとクラブ活動・部活動

前節で述べたようなクラブ活動・部活動の現在の変

化は、現在進められている教育改革の一環としてとらえることができよう。では、クラブ活動・部活動の変化と、教育改革の関連については、どのような点が指摘されているのだろうか。また、教育社会学的な視点からは、それらの点についてどういった問題を指摘することができるだろうか。

新学習指導要領における、クラブ活動・部活動に関する重要な変化は、必修クラブの廃止である。そこで、必修クラブの廃止と教育改革の関連に関する議論を見てみたい。中井は、必修クラブの廃止のメリットを五つ挙げているが、そのうちの三つは近年の教育改革の動向と関連していると言えるだろう(中井 2001)⁴⁾。第一に、必修クラブの廃止は、学校スリム化に連動した、特別活動のスリム化の一環であることである。第二に、児童・生徒の興味・関心の多様化へ対応するため、学校が家庭や地域にクラブ活動を委託することを含めて、教育環境を柔軟に考え、整えていくことである。第三に、クラブ活動で培ってきた体験を総合的な学習の時間に生かし、進展させるということである⁵⁾。これらは、学校縮小論や教育自由化論、さらに個性の尊重といった現在の教育改革と関連させてとらえることができるだろう。

必修クラブの廃止と関連したそれらの教育改革の動向に関して、教育社会学的な視点からはどのような指摘がなされているだろうか。まず、教育自由化論や学校縮小論について、藤田は次の二つの点から階層差の拡大の危険性を指摘している(藤田 2000)。一つは、教育自由化や学校縮小は、子どもの教育に対する家庭・保護者の責任と権限を拡大することにつながり、それゆえ、子どもの生活のありようは家庭の経済資本・文化資本・社会資本に左右される度合いが高まるという点である。もう一つは、学校は非分割的・非可動的なものであるために地域差を伴っており、教育自由化や学校縮小の結果、教育機会の地域差をも生み出す可能性があるという点である。次に、個性の尊重という動きについても同様に、家庭の文化的な背景によって、興味・関心や学習意欲が影響を受けているがゆえに、教育の不平等を拡大してしまう可能性が指摘されている(苅谷 2001)。

教育社会学におけるこのような指摘を踏まえるならば、必修クラブの廃止とそれに伴う部活動の変化といった問題は、必修クラブの教育的役割といった問題だけではなく⁶⁾、家庭の背景による子どもの分化と、学校における教育活動の編成のありようがもたらす子どもの分化とが複合的に絡み合う問題としてもとらえ

る必要があるのである。

<註>

- 1) 研究グループのメンバーは、本稿執筆者の他に、大前敦巳(上越教育大学)、羽田野慶子(比較教育社会学コース大学院生)である。
- 2) 従来のトラッキング・パースペクティブに基づく学校文化モデルによる研究の展開については、西島他(1999)で整理したので、参照してほしい。
- 3) 中学で2002年度から、高校で2003年度から廃止となる。さらに小学校でも従来週1時間程度の時間数として規定されていたものが削られ、「適切な時数(の充填)」に変わることから、軽減されていく影響も予期される。
- 4) 残りの二つは、学校の小規模化・少人数化への対応と、クラブ活動を学校がより自由に組織化できるという指摘である。なお、後者については、必修クラブが廃止されるわけではない小学校に関する指摘であると考えられる。
- 5) 中井以外にも、クラブ活動の廃止の理由として、部活動による代替、地域の関係諸団体等との関連、総合的な学習の時間の創設という三点を指摘するものもある(山田 2000)。後二者は、中井の指摘する三つの点と関連が深いと考えられよう。
- 6) 中井は、各自の興味・関心に基づく「いま=ここで」の現在の充実と、心のふれあいによる人間形成を必修クラブの果たしてきた教育的機能であるとし、それが必ずしも部活動で代替されるものではない点を必修クラブ廃止のデメリットとして挙げている(中井 2001)。

II 調査の概要と調査対象校・対象者の特徴

A 調査の概要

1 調査時期・方法

2001年3月に、東京・新潟・岐阜・静岡・島根・高知・鹿児島 の1都6県の中学校35校(公立34校、私立1校)の2年生4,206名を対象に、原則として教室での集合自記式の質問紙調査を実施した(事情により自宅に持ち帰って記入したものを回収した学校も一部ある)。また、対象校の部活動顧問対象に簡単な質問紙調査を実施し、各部の活動の様子に関する情報を収集した。その他、部活動に関わる行政文書や対象校の学校要覧など部活動の動向がわかる資料を収集した。

2 調査対象校の選定

今回の調査では、前回の98年度調査で対象とした東京都23区に加え、地域性、学校規模、中学校の密集度を考慮して、東京都下および他の6県を絞り込み、それら都県内で何らかの部活動でめだつた活躍がみられる中学校を調査対象校として選定した。調査対象学年

は、部活動の中心になってきており、これから進路選択を考えはじめる時期であること、また新教育課程への移行措置の影響が及ぶ程度が小さいことを考慮して、2年生とした。

B 調査対象校・対象者の特徴

本節では、調査対象校と対象者について基本的な特徴をまとめておく。必要に応じて、98年度調査の結果と対比させて論じることにする。ただし、授業や行事など学校生活のさまざまな場面に生徒がどのように関わっているかについては、多元的学校文化モデルに向けた分析の都合上、第Ⅲ章で論じる。

1 サンプル構成

サンプル構成は表Ⅱ-1の通りである。なお、98年度調査では、東京都23区内の公立中学校6校の912名が調査対象であった。

2 部活動への参加の様子

サンプル全体でみると部活動への加入率は87.8%であった。そのうち1.4%は2つ以上の部活動に加入していた。学校別の加入率は表Ⅱ-1の通りである。なお、全生徒に部活動への加入を義務づけている学校でも、部活動への加入率が100%でない場合がある。これは生徒自身の判断により、「部活動に入っていない」という回答をする場合があったためである。

加入者のなかでみると、運動部77.3%、文化部20.6%であった(残り2.1%は部活動名が無回答)。98年度調査と比較すると運動部が10ポイント強多い。しかし、都県別に集計したところ、東京対地方といった系統的な差異があるわけではない。男子の方が女子より運動部に所属する傾向があることは前回の調査と同じである。

部活動にどのくらい力を入れているかを尋ねたところ、「かなり力を入れている」が39.4%、「まあ力を入れている」が39.7%であった。ほぼ8割が部活動に積極的に関わっているという結果は前回の調査より10ポイント強高いのであるが、これも東京の特徴ではなかった。男子の方が女子より積極的なのは前回の調査と同じである。

部活動のなかで一番楽しいことは何かを尋ねたところ、「練習や活動そのもの」が39.4%、「部員とのおしゃべり」が32.0%、「試合やコンクール」が21.7%であった。前回の調査より若干「練習や活動そのもの」が多いが、ほぼ同様の結果である。男子が「練習や活動そのもの」や「試合やコンクール」を楽しみにし、女子が「部員とのおしゃべり」を楽しみにする傾向があることも同じである。

表II-1 調査対象校・対象者のプロフィール

	学校所在地	サンプル数(人)				部活加入義務づけ (調査実施年度)	クラブ活動の有無 (調査実施年度)	部活動加入状況(%)	
		男子	女子	無回答	合計			加入率	無回答
東京都 (7校)		353	302	15	670			91.5	1.0
	T1中 大都市部	33	33		66	×	×	92.4	
	T2中 大都市部	39	31	2	72	×	×	95.8	1.4
	T3中 中小都市部	56	45	2	103	×	×	88.3	
	T4中 中小都市部	16	16	1	33	○	×	90.9	6.1
	T5中 中小都市部	73	76	2	151	×	×	83.4	2.0
	T6中 大都市部	89	63	4	156	×	×	94.2	0.6
	T7中 大都市部	47	38	4	89	○	×	100.0	
新潟県 (6校)		269	251	9	529			96.6	0.4
	N1中 郡部	17	16	1	34	×	×	100.0	
	N2中 郡部	29	32		61	○	×	100.0	
	N3中 中小都市部	33	36		69	○	×	97.1	
	N4中 中小都市部	36	32		68	×	×	80.9	2.9
	N5中 郡部	128	110	5	243	○	×	98.8	
	N6中 郡部	26	25	3	54	○	×	100.0	
岐阜県 (4校)		412	397	15	824			88.3	0.8
	G1中 中小都市部	105	104	1	210	×	×	95.7	1.0
	G2中 中小都市部	129	127	5	261	×	×	75.1	1.5
	G3中 中小都市部	69	52	1	122	○	○	97.5	
	G4中 中小都市部	109	114	8	231	×	×	91.8	0.4
静岡県 (6校)		337	284	8	629			97.0	0.5
	SO1中 郡部	78	66	2	146	○	○	97.3	1.4
	SO2中 大都市部	60	43	2	105	×	×	95.2	
	SO3中 大都市部	57	45	1	103	×	×	96.1	1.0
	SO4中 大都市部	36	35		71	○	×	98.6	
	SO5中 大都市部	53	47	1	101	×	×	96.0	
	SO6中 大都市部	53	48	2	103	×	×	99.0	
島根県 (4校)		197	170	3	370			97.0	0.5
	SN1中 中小都市部	78	60	2	140	○	○	100.0	
	SN2中 郡部	34	24		58	○	×	100.0	
	SN3中 中小都市部	32	29	1	62	○	×	88.7	1.6
	SN4中 中小都市部	53	57		110	×	○	96.4	0.9
高知県 (4校)		203	245	12	460			81.7	0.9
	KC1中 郡部	23	29		52	×	×	98.1	
	KC2中 郡部	28	27		55	×	×	98.2	1.8
	KC3中 中小都市部	120	147	10	277	×	×	72.2	1.1
	KC4中 中小都市部	32	42	2	76	×	×	93.4	
鹿児島県 (4校)		374	311	39	724			68.4	4.7
	KG1中 大都市部	84	40	2	126	×	○	66.7	2.4
	KG2中 大都市部	141	133	1	275	×	×	62.2	7.3
	KG3中 中小都市部	117	110	32	259	×	×	74.5	1.9
	KG4中 大都市部	32	28	4	64	×	×	73.4	9.4
合計		2145	1960	101	4206			87.8	1.4

注1) KG1中のみ私立中学校。他はすべて公立中学校。

注2) 学校所在地(市区町村単位)の分類は次の通りである。

大都市部…人口40万人以上の市と東京都23区。

中小都市部…人口40万人未満の市。

郡部…町村。

注3) 調査実施の前年度の時点では部活代替(部活加入義務づけが○、クラブ活動の有無が×)の学校が一般的だったが、この度の改革を受けた移行措置として、調査実施年度から部活代替をやめる学校が多く出てきている。

高校進学後、部活動に入りたいと思っているかを尋ねたところ、全体で73.2%が高校で部活動に入ることを考えていた。男子の方が女子よりも高校での部活動加入に積極的である。入りたい部まで決まっているのは29.8%、どちらかといえば運動部を考えているのが30.7%、どちらかといえば文化部を考えているのが12.7%であった。

3 学業の様子

クラス内での相対的な学業成績(生徒自身の主観的な評価による)を尋ねたところ、「上の方」が8.2%、「上の方」と「まんなかぐらい」の間が21.0%、「まんなかぐらい」が35.6%、「まんなかぐらい」と「下の方」の間が18.1%、「下の方」が8.2%であった。前回同様、やや低めに偏りがあるが、ほぼ正規分布に近い。

通塾率57.4%も前回調査とほぼ同じである。

4 将来の進路展望

中学校卒業後の進路については、「高校卒業後、仕事をする」が22.7%、高校卒業後さらに「専門学校に進学」が25.5%、「短大に進学」が8.8%、「4年制大学に進学」が27.7%、「考えたことがない」が10.8%であり、ほぼ前回調査と似た分布ではある。今回のサンプルが各都県を代表していると考えられる根拠はないため判断には慎重でなければならないが、今回の調査対象に含まれる東京23区内の中学校の生徒だけで集計して全体と比較すると、前回調査の分布に一層似通ってくることは否定しがたい。具体的には、高卒就職を考えている割合が低く、4年制大学への進学を考えている割合が高くなっている。

III 生徒の分化と学校生活へのコミットメント

生徒文化研究においては、学校の中心的な価値体系である学業によって生徒たちは序列づけられるため、彼らの自己有能感や学校的秩序への適応、進路展望の分化は、学業成績に大きく規定されているという「地位欲求不満説」が支持されてきた(耳塚 1980、潮木他 1980など)。しかし、学業成績以外の要因がどのように生徒たちの分化に関わっているのか、つまり、「教育と選抜との関係が複雑かつ微妙に入り組んでいる」(志水 1987)状況については必ずしも明らかにされてこなかった。

それに対し、われわれは東京都における98年度調査に基づき、学業成績の影響力は認めつつも、それとは独立して、部活動などのさまざまな学校生活場面へのコミットメントのありようが生徒たちの分化の規定因となっているという「多元的学校文化モデル」を提出した(西島他 1999)。また、授業や昼休みといった学校生活場面と部活動の場面を同時に考慮した場合にも、部活動の場面はそれらの場面とは独立して、生徒たちの分化に影響を及ぼしていることも確認した(藤田 2001)。しかし、それは東京都を事例としたものであり、必ずしも東京都以外の地域に適用可能だとは限らない。また、学校生活場面に対するコミットメントがそれぞれ独立して生徒の分化に影響を及ぼしていることは明らかにされたが、それらの学校生活場面同士がどのように関連しているのかは検討していない。

そこで本章では、全国七都県のデータをもとに、多元的学校文化モデルが東京都だけではなく、全体的に適用可能なのか、また、それぞれの学校生活場面の関

係がどのようなものなのかを検討する。その作業によって、移行期における中学生の分化のありようを考察し、今後予測される変化のなかで注目すべき点について示唆を得ることを本章の主題とする。

A 学校生活諸場面に対する生徒のコミットメント

1 コミットメントの状況

分析に先立ち、学校生活の諸場面に対する生徒たちのコミットメントのありようを概観しておこう。

本調査では、学校生活の諸場面として、学業、昼休み、委員会、部活動といった日常の諸場面と、文化祭や運動会といった行事の場面を取りあげている。また、それらの場面に対するコミットメントの状況については、関わりや取り組み方という行動面と、それらの諸場面を楽しみにしていたり、好きであったりするかどうかという意識面とに分けて尋ねた。

表Ⅲ-1は、諸場面に対してコミットメントしているという回答のパーセンテージを示している。行動面については、いずれの場面においてもおおむね7割以上の生徒たちが積極的にコミットメントしていると回答している。ところが、意識面については、学業や委員会といった場面での肯定率が3~4割台、運動会や文化祭といった行事場面が6割強、部活動が8割弱、昼休みが9割以上というように、かなり様相が異なっている。つまり、行動面で多くの生徒が諸場面にコミットメントしているものの、それは必ずしも意識面でのコミットメントを伴っているとは限らないのであり、意識と行動の両面ともコミットする場面と、そうではない場面とは生徒ごとに違っている。行動面からだけではとらえられない、コミットメントの強さの違いが存在しているのである。

2 コミットメントのパターン

学校生活の諸場面に対するコミットメントのありようをさらに探るため、コミットメントの仕方にはどの

表Ⅲ-1 学校の諸場面に対するコミットメント
(単位=%)

学校生活の諸場面	行動面	意識面
学業場面	78.5	37.4
昼休み場面	87.6	91.6
文化祭場面	69.3	63.9
運動会場面	81.8	64.5
委員会場面	69.4	42.6
部活動場面	70.3	79.6

表Ⅲ-2 コミットメントクラスターのプロフィール (単位=%)

	全般型	部活・行事型	行事型	離脱型
昼休み場面	89.9	91.6	87.7	75.9
文化祭場面	80.7	75.3	89.4	6.5
運動会場面	87.1	90.2	89.1	8.0
部活場面	100.0	100.0	0.0	44.4
学業場面	100.0	0.0	39.2	16.0
委員会場面	67.4	44.1	53.5	8.6

※肯定率が6割以上のところを太字で示してある。

表Ⅲ-3 自己評価とコミットメントクラスターの関係 (単位=%)

学業成績	全般型	部活・行事型	行事型	離脱型	有意水準
下位	79.3	70.0	64.2	54.4	***
中位	86.8	77.1	68.2	56.9	***
上位	88.5	87.5	84.4	72.1	***
n	872	1016	564	1061	3513

(*** p < 0.001 : χ^2 検定)

ようなパターンが見られるのかを検討しよう。

まず、意識と行動の両面において諸場面に対するコミットメントの高い者を抽出し、次に、クラスター分析によってコミットメントのパターンを4つの側面に分割した¹⁾。

表Ⅲ-2は、各クラスターと諸場面へのコミットメントをクロスさせ、それぞれのクラスターのプロフィールを示したものである。一つめは、ほぼすべての場面へのコミットメントの高いクラスターである。これは、サンプルの25.0%を占めており、以下、「全般型」と呼ぼう。二つめは、学業には全くコミットしないが、文化祭や運動会、部活、昼休みへのコミットメントが高いクラスターである。このクラスターに属する割合は、全体の28.7%であり、「部活・行事型」と名づける。三つめは、部活にはまったくコミットしないが、文化祭と運動会、昼休みへのコミットメントが特に高いクラスターである。ここには、全体の16.1%の生徒が属しており、「行事型」と呼ぶことにする。四つめは、昼休み場面のみコミットメントが特に高いクラスターであり、30.3%の生徒がこのクラスターに含まれている。多くの場面にコミットしないこのクラスターを「離脱型」と名づけることにする。

このように、学校生活の諸場面に対するコミットメントは、生徒によってパターンが異なっているのであり、全般型、部活・行動型、行事型、離脱型の順にコ

ミットする場面が少なくなっている。そこで、このようなコミットメントのありようの違いと、分化との関係を検討していこう。

B コミットメントクラスターと生徒の分化

前節で検討したコミットメントのパターンの違いは、生徒の分化とどのように関係しているのだろうか。これまでの学校社会学では、高い学業成績が良好な自己評価をもたらす(社会化)、学校の秩序に順応させ(正当化)、教育アスピレーションを高める(配分)と言われてきた。このような三つの側面の分化に対し、学校の各場面に対するコミットメントのありようは、学業成績とは独立して、影響を及ぼしているのだろうか。

1 社会化：自己評価の分化

まず、生徒の自己評価の分化について検討しよう。自己評価は、「がんばればたいていのことはできる」という設問によって測り、学業成績を統制した上で、四つのクラスターとクロスさせた。なお、表中の数値はこの設問に肯定的に回答した割合を示している。

表Ⅲ-3に示したように、いずれの学業成績においても自己評価とクラスターとの関係は有意であり、学業成績とは独立して、コミットメントする場面が多くなるにつれて自己評価も高くなっているのである。学校の教育活動のなかに組織されている多様な場面が、生徒の自己評価を高める資源として機能していること

表Ⅲ-4 学校的秩序への適応とコミットメントクラスターとの関係

(単位=%)

学業成績		全般型	部活・行事型	行事型	離脱型	有意水準
下位	テスト勉強する	82.4	65.4	65.9	52.7	***
	n	199	405	214	444	
中位	テスト勉強する	89.5	85.0	82.4	76.1	***
	n	351	346	188	364	
上位	テスト勉強する	92.6	82.9	82.8	80.2	***
	n	311	252	151	243	
下位	学校は楽しい	92.4	75.8	68.2	47.0	***
	n	197	405	214	443	
中位	学校は楽しい	94.3	80.9	76.1	52.7	***
	n	351	346	188	364	
上位	学校は楽しい	94.2	81.3	72.4	52.7	***
	n	312	252	152	243	

(***) $p < 0.001$: χ^2 検定)

表Ⅲ-5 学業成績別・各クラスターの平均進路希望年数

学業成績	全般型	部活・行事型	行事型	離脱型	全体平均
下位	13.7	13.3	13.3	13.2	13.3
中位	14.4	14.0	14.2	14.1	14.2
上位	15.1	14.7	14.9	15.0	14.9

がうかがわれる。

2 正当化：向学校－反学校の分化

次に、学校的秩序への適応について見ていこう。ここでは、次の二つの側面から検討することにした。一つは、学校の中心的な活動である学業である。そこで、学業に対する順応を測るために、「テストの前はがんばって勉強する」かどうかを尋ねた設問を用いることにする。もう一つは、学校に対する全体的な適応である。その度合いを測るために、「学校は楽しい」という設問を用いた。それらの側面と、コミットメントに関する四つのクラスターにはどのような関係があるのだろうか。

表Ⅲ-4は、「テスト勉強をする」かどうか、「学校は楽しい」かどうかを尋ねた設問に対する回答と、コミットメントに関する四つのクラスターとを学業成績別にクロスさせたものである。なお、表中の数値はそれらの設問に対する肯定的な回答の割合を示している。

表に明らかなように、いずれの学業成績においても、学校的秩序への適応とクラスターとの関係は有意である。いずれの学業成績においても、コミットする場面の多い方が学校的秩序にもよく適応している傾向が見られるのである。

このように、学業成績とは独立して、学校生活場面に対するコミットメントのありようが学校的秩序への適応にも影響を与えていることがおおむね確認された。

3 配分：進路希望の分化

では、進路希望の分化についてはどうだろうか。進路希望の分化とクラスターとの関係について検討するため、各クラスターの平均進路希望年数を学業成績別に調べ、その結果を表Ⅲ-5に示した。

表から分かるように、全般型の平均値がいずれの学業成績でももっとも大きい。また、進路希望年数の分散に対するクラスターの影響は有意であるが(上位： $F=3.374$, $p=0.018$ 、中位： $F=3.919$, $p=0.008$ 、下位： $F=4.968$, $p=0.002$)、これまでの分析とは異なり、コミットメントする場面が多くなるにつれて平均値も高くなるという関係は見られない。

また、多重比較を行った結果、成績下位群では、全般型とそれ以外の差が有意であり、成績中・上位群では、全般型と部活・行事型の間だけが有意であった。これらの結果は、どのように解釈できるだろうか。

第一に、全般型の平均進学希望年数がいずれの学業成績においてもいちばん高いことは、コミットメントのありようが進学希望に影響していることをあらわし

ていると言えるだろう。しかし、それ以外のクラスターについては、コミットメントと進学希望との間には関係がないということだろうか。

ここで注目されるのは、部活・行事型である。このクラスターは、表Ⅲ-2に示したように、学業場面に意識と行動の両面においてコミットメントしていると回答した者がまったく存在しないという特徴がある。また、平日の家庭での学習時間をクラスターごとに比べてみると、全体の平均値が約43分であるところ、部活・行事型は約36分であり、もっとも短い。その特徴を考慮すると、学業成績下位を除き、部活・行事型の平均進学希望年数がクラスターのなかでもっとも小さいことも首肯される。しかし、部活・行事型は、前項までに指摘したように、全般型に次いで自己評価や学校的秩序への適応が高いのである。特に、「テスト勉強をする」という設問においても、おおむね全般型について肯定する割合が高かったことは注目に値しよう。

また、興味深いことに、部活・行事型の平均進学希望年数と有意な差が見られるのは全般型との間だけであり、その他のクラスターとの差は有意ではない。つまり、学業場面に對する強いコミットメントがまったく見られず、家庭学習時間がもっとも短いとしても、全般型以外のクラスターとの間には、進路希望における有意な違いが存在しないのである。

これらのことから、学業場面以外の諸場面に對するコミットメントの高さと、それによる自己有能感や学校的秩序への適応の高さが、進路希望において全般型以外のクラスターとの差を補償していると考えられるのではないだろうか²⁾。つまり、仮に「部活・行事型」に属する生徒たちの学校生活場面に對するコミットメントが低下するならば、進路希望もさらに下がってしまう可能性が示唆されるのである。

C 本章のまとめと考察

これまでの分析結果をまとめ、その含意について考察しよう。

第一に、学校の諸場面に對するコミットメントと生徒の自己評価との間に有意な関係が見られ、学業成績とは独立して、コミットメントする場面が多くなるほど自己評価も高まる傾向が見られた。第二に、学校的な秩序への適応についても、コミットメントする場面が多いほうが、学業や学校生活全般に對する順応度が高くなるという関係が見受けられた。第三に、進路希望については、学業場面へのコミットメントが低い場合でも、その他の場面に對するコミットメントの強さが、

進路希望に對する補償効果をもつ可能性が示唆された。

これらのことから、学校の諸場面に對するコミットメントが、学業成績とは独立して、生徒たちの分化のありように影響を与えているという多元的学校文化モデルは、東京以外だけではなく、全体的にも当てはまる可能性が高くなったと言えるだろう。学校生活のそれぞれの場面に對するコミットメントのみならず、コミットメントのパターンのありようが、分化の様相と関連をもっていると考えられる。

では、今後予測される変化のなかで注目されるのはどのような点だろうか。学校スリム化は、部活動の廃止や行事の精選といった形で、あるいは、部活動などの地域社会への移譲といった形で、生徒たちがコミットする学校の諸場面の減少を招来することになろう。それは、次の三つの事態を引き起こす可能性がある。第一に、生徒の自己評価や学校的秩序への適応を促進する機能を果たす場面が減少することによって、生徒と学校の双方に對して影響を及ぼす可能性である。第二に、部活・行事型のように学業場面にコミットしない生徒たちに對する進路希望への補償効果が減少し、彼らの進路希望をさらに低めてしまう可能性があることである。第三に、コミットメントする場面の減少が、生徒たちの分化に對する学業成績の相対的な重みを高めてしまう可能性である。今後の変化のなかで、これらの点について注目していく必要があるだろう。

日本の学校に對しては、教育機能の肥大やそれゆえのスリム化の必要性などが叫ばれているが、これまで見てきたように、さまざまな活動が組織されていること自体が日本の学校の特徴であり、それゆえに少なからぬ生徒たちが良好な学校生活を送ることができているのだとすれば、何のために、どの点をどのようにスリム化するのかをきちんと検討することが肝要ではないだろうか。

<注>

- 1) コミットメントのありようを意識と行動の両面から尋ねているため、両面からコミットメントする者、いずれかの側面だけにコミットメントする者、いずれからもコミットメントしない者が抽出されることになる。しかし今回は、コミットメントが高いことの効果を見るために、意識と行動の両面からコミットメントしている者に焦点を当てて考察する。その他の者たちをも視野に入れた分析は今後の課題である。
- 2) あるいは、行事型や離脱型においては、諸場面に對するコミットメントの低さが進路希望年数を引き下げる効果を与えていると考えることもでき、部活・行事型における補償効果と相乗的に効果を及ぼしている可能性もあるだろう。

IV 部活動における生徒の友人関係

A 問題の所在

本章では、学校という生活空間における中学生の人間関係に着目する。とくに部活動という場を介した人間関係の成り立ちを探ることで、学校生活場面のひとつとしての部活動を問いなおすてがかりを求めている。

中学生にとっての仲間づくり(グルーピング)の重要性については、一定の見解が認められるところであろう。さらに、その契機は多様であり、たとえばクラスメート(級友)や、部活動を通じた友人などがあげられる。現状では、中学生の生徒文化や人間関係をみていく場合の小集団の枠組みは、これらクラスメートや部活の仲間など、それぞれ一括りに語られるきらいがある。はたして、彼らの関係を一括りにして一様にみなしてよいのだろうか。

部活動が、中学生にとって、重要な友人関係を結ぶ機会として存在してきたことはたしかである。しかしその機会が変貌しようとしている。2002年度・2003年度の教育課程改訂に際して、現状では、部活代替制度の廃止を中心に、社会教育との連携や合同部活体制の模索など、部活動には従来のdomesticな自校中心の学校空間から放たれる方向性がうかがえる。結果的に、生徒には、従来とは異なる生徒同士の人間関係の構築や、その意識面への変化が現れると予見されよう。友人が入るからその部に入部した、あるいは友人がいたから部活動を続けることができた等、概して、部活動とそこでの友人関係を密接な関連で語る事例がよくみられる¹⁾。ならば、部活動の形態が変わることで、生徒たちは友人の持ち方を変えるかもしれないし、ややもすれば部活動への参加の形態にも変化が起きるとも考えられる。そこで、部活動について生徒の仲間づくりの分化に着目し、解明していくのが本章の目的である。

B 分析の視点と手づぎ

先の98年度調査において、矢野は、多元的学校文化モデル的観点から、部活動と教室内空間での生徒たちの在りようは異なると仮定し、いわゆる「部活仲間」と括ることのできる人間関係に着目し、部活動の特性との関係を探った(西島他 1999)。そこでは、部活動をともしする仲間を友人として求める志向性があり、それが、いわゆる運動部・文化部の別や、男子・女子の別よりもむしろ、チーム競技・個人競技や活動頻度の

多寡といった、部活動の活動形態に関係がみられる一方、学業成績とは関係のみられないことを示した。

それでは、いかなる要因が部活仲間志向を導くのだろうか。本稿では、部活仲間へと向かわしめる分化を、部活動をめぐる生徒の意識からとらえようと試みる。部活動という場において、いかなる意識を持つ生徒たちが部活動をともしする相手を友人として志向するのか(部活仲間志向)、あるいは部活仲間以外の相手へとその気持ちを向けるのだろうか。

部活動に対する生徒の参加の在りようは、必ずしも一様ではない。部活動に対する生徒の目的意識は、必ずしも活動内容の上達や成果そのものばかりではなく、仲間と集うことそのことにも意義を見出していると見受けられる。たとえば、今回の七都県調査についてみても、部活動の楽しさを問う設問に対して、練習や活動自体をあげるものが39.4%に対し、部員とのおしゃべりが32.0%、あるいは試合やコンクールが21.7%と、その回答に散らばりがある。つまり、部活動という場は、純然たる目的的な場としてだけでなく、個々の生徒にとって各々別の意味を持ちうる。それはおそらくクラスがそうであるように、多義的な可能性を持つもうひとつの場として存在している²⁾。部活動についてその特性を考慮すれば、クラスを越え、学年を越えた、教室空間とは別の人間関係を持ちうる契機に富む場であることは確かである。部活動という場で、個々の生徒が、部活に対するそれぞれの世界観を持ち、各自の意識を通して取捨選択しつつ、それぞれの人間関係を結ぶ結果として、部活動での友人関係が成立するのであろう。

Duckによれば、友人関係がもたらす機能について、帰属感・同盟感、心理的な基準、物理的・心理的援助などに整理される(Duck 1995)³⁾。このような意識や感覚を共有することが、互いに友人である意義を認めさせ、また、それらを期待することが互いを友人関係へと向かわせるであろう。そこで生徒の意識に着目して、その友人関係の成り立ちを追うことができる。部活動に対する生徒の意識が、彼らを部活仲間へと結びつけるだろう。さらに、その意識は、単に部活動を対象として独立して成立するとも限らず、彼らが学校生活全般を営むなかで培われたものだと考えられる。ならば、学校生活への関わり方いかんによって、生徒の部活動に対する意識にもちがいが現れると予想される。そこから彼らの部活動における人間関係の結び方の分化を探る手がかりが得られるであろう。そこで前章で案出した、学校の諸場面に対するコミットメント

のクラスターを用いて、生徒の部活仲間志向の現れ方を探ることとする。

部活動に対する意識については、①部活動の内容に対する意識(その活動種目が得意かどうか、楽しみなのは活動や試合か、おしゃべりか)、②部活動への期待意識(友人を得られる、上達できる、精神が鍛えられる、進学・就職に役立つ)、③部活動に関する規範意識(部活動と勉強の両立が大切、部活動をサボるのはよくない)を用いた。これらについて、4つの学校コミットメントのクラスター(全般型、部活・行事型、行事型、離脱型)を考慮に加え、クロス集計でクラスターごとの関係の現れのちがいを追った。

①部活動の内容に対する意識とは、生徒自身が取り組んでいる活動に対して、その場をなにかを獲得する目的的な場としているのか、あるいは、所与の場としてその生徒なりに意味探索的にその場に参加しているのか、とらえ方のちがいに着目した指標としている。

②部活動への期待意識については、部活動に対する目的意識や効能が現れていると考える。その場に集うことへの理想的な意味づけがかいまみられよう。

③部活動に関する規範意識は、広く中学生に求められてきた神話的とさえいえる価値づけや公正観・同調性といったものを選出した。個々の部活動の活動内容や意義に直接ふれるものではないが、彼らの部活動への取り組みを左右する代表的な価値観としてとりあげた。

これら三種の意識によって、生徒の部活動という世界観をとらえることにする。

C 学校コミットメントのちがいからみる、部活意識と部活仲間志向の関係

まずはじめに、全体としての部活仲間志向を概括しておく。「ふだん一緒にいる友だちグループがありますか」との問いに、「はい」と答えたものは、全回答の89.8%にのぼる(「いない」は9.9%、無回答は0.3%)。そのうち、「そのグループはおもに、同じ部活の人である」と答えたものは56.5%(全体では49.3%)であった。約半数強のものが、部活動の仲間とグループを構成していることがわかる⁴⁾。

この部活仲間志向を、男女別でみると、男子60.6%、女子52.9%と、男子のほうがポイントが高い。地域差についてみれば、大都市部(人口40万人以上&東京23区)、中小都市部(人口40万人未満)、郡部と三段階に分けてみると、それぞれ55.0%、55.4%、62.7%となり、地域差が現れる。いわゆる人口の多い地域と比較

的少ない地域では、少ない地域のほうに、より部活動の友人を志向する割合が高くみられた。

今度は、部活動の活動形態に着目して部活仲間志向を概括しよう。運動部・文化部別でみると、運動部64.5%に対し文化部56.2%と、運動部員のほうがその傾向が高い。また、平日のみ活動している部と土日祝日まで活動がある部に二分して比べると、前者が60.2%に対し、後者は64.7%となり、活動をともにする時間の長短が関係する。もっとも差が現れたのは、その活動が個人競技か、チーム競技かである。個人競技は部活仲間志向が48.3%と、むしろ非部活仲間志向に傾くのにに対し、チーム競技では部活仲間志向が66.9%にのぼる。部活動のふだんからの活動形態の持つ生徒の人間関係への影響力は、七都県に拡大してみても指摘できることがわかる。

それでは、このような部活仲間志向は、生徒の対部活意識とどのように関連するのだろうか。まず学校コミットメントのクラスターのちがいに則した概況を把握しておく。総じて、部活仲間志向は、全般型と部活・行事型でともに約66%と四つのクラスターのなかでは比率が高い。離脱型で50.1%とほぼ五分であり、一方、行事型では約58%のものが非部活仲間志向である。これはもとより、行事型と離脱型に弁別される生徒が、部活動に対するコミットメントが低いことが反映している。

それでは、このようなちがいを念頭に、それぞれのクラスターごとに、各意識と部活仲間志向との関係をクロス集計したものを整理していこう。

まず部活動の内容に対する意識をみる。「活動内容の得意・不得意」は、クラスターの別なく部活仲間志向との関係はみられない。概ね得意だと回答するものが多い全般型(58.5%)、部活・行事型(54.6%)と、不得意だとするほうが多い離脱型(66.6%)、行事型(76.0%)とに大別される。一方、「活動における楽しみ」については、表IV-1のように、部活・行事型と離脱型、全般

表IV-1 各クラスターごとの「①部活動の内容に対する意識」と部活仲間志向のクロス集計

	部活動で楽しいのは活動や試合		
	はい	いいえ	p値
離脱型	63.4%	55.3%	0.024*
行事型	52.0%	54.6%	0.663
部活・行事型	69.0%	60.3%	0.014*
全般型	67.5%	60.9%	0.097 †

χ^2 検定 *** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, † p<0.10

型(10%水準)において、活動や試合を楽しみにするものほど部活仲間志向がみられる。行事型のみが、部活仲間志向とは関係なく、基本的におしゃべりを楽しみとする⁵⁾ものが多いという独自の傾向が現れている。

活動内容自体が得意ではない傾向の二つのクラスターのなかでも、離脱型は、活動内容が楽しみであれば、部活仲間をつくる傾向があり、部活動へのコミットの高まりが見込まれるのに対し、行事型には、それがうかがえない。部活動の活動内容自体に、肯定的な意味付与ができずにいる生徒たちなのかもしれない。

つぎに、期待意識についてみる。とりわけ「部活動によって友人が得られる」とする意識は、おしなべてどのクラスターでもかなり高い比率で支持される(離脱83.4：行事86.5%：部活・行事95.5%：全般95.3%)。どのクラスターでも部活仲間志向との関係が有意であり、部活動が一般的に友人関係拡張の場として意味づけられ、機能しているであろうことが確認できる(図表は省略する)。

期待意識のなかでは、表Ⅳ-2に示したような三つについて、注目できるちがいがみられた。行事型や離脱型といった部活動に低コミットなタイプにおいて、「部活動で(その活動内容が)上達できる」という期待意識と部活仲間志向との関係が有意であった。上達できれば、部活仲間に気持ちが向かう離脱型に対し、上達できるとしても部活仲間に気持ちが向くわけではなく、上達できると思わないもの同士で仲間づくりが現れる可能性がある行事型とは対照的である。この両クラスターの生徒は、総じて活動が不得意な傾向があ

る。上達できないことも、その捉え方で彼らの部活動への参加の在りようは分かれる。

「部活動で精神的に強くなれる」という意識については、行事型以外の三つのクラスターで、部活仲間志向との関係が有意である。とくに、部活動が不得意な傾向がある離脱型においても、肯定と否定のポイント差がかなり開いて反応している点は興味深い。ちなみに、「礼儀正しくなれる」という期待意識にもクラスターごとで似たような傾向がみられる。精神面・礼儀という内面性が高められる価値観については、学校諸場面へのコミットの多寡にあまりかかわらず行事型を除き広く意識化されていることがうかがえる。

「進学や就職に役立つ」と期待する意識については、行事型において、部活仲間志向との関係が有意であり、非部活仲間のほうに強く現れる。全般型は、進学や就職に役立つという肯定的意識に部活仲間志向が関係する一方で、行事型は、部活動が就職や進学といった実利的な側面に役に立つとは考えないもの同士が、かえって部活動で仲間をつくと解釈できる。この点は、さらなる検討の余地が残されるところである。

このように、部活動に対してともに低コミットの行事型と離脱型でも、部活動に対する期待意識の現れが明確に異なる。行事型の生徒にとって、技能の上達や内面性の向上といった期待意識ではない別の価値観について、部活仲間として集うことの意味をいかに持っているのか、持ちうるのか、再度考える必要があるだろう。

最後に、部活動に関する規範意識についてみる。表

表Ⅳ-2 各クラスターごとの「②部活動への期待意識」と部活仲間志向のクロス集計

	部活動で上達できる			部活動で精神的に強くなれる			部活動は進学・就職に役立つ		
	はい	いいえ	p値	はい	いいえ	p値	はい	いいえ	p値
離脱型	52.1%	42.4%	0.018*	54.9%	41.6%	0.000***	48.3%	51.5%	0.337
行事型	38.3%	52.5%	0.006**	41.3%	42.1%	0.856	35.4%	47.1%	0.008**
部活・行事型	67.1%	59.7%	0.229	67.8%	59.6%	0.061†	67.5%	65.9%	0.608
全般型	66.2%	56.7%	0.281	67.6%	51.8%	0.004**	68.6%	62.1%	0.058†

χ^2 検定 *** p<0.001. ** p<0.01. * p<0.05. † p<0.10

表Ⅳ-3 各クラスターごとの「③部活動に関する規範意識」と部活仲間志向のクロス集計

	部活動と勉強の両立は大切だ			部活動をサボるのはよくない		
	はい	いいえ	p値	はい	いいえ	p値
離脱型	51.8%	43.7%	0.043*	54.6%	39.2%	0.000***
行事型	40.9%	43.2%	0.659	40.9%	42.7%	0.701
部活・行事型	67.8%	57.0%	0.031*	67.4%	58.1%	0.105
全般型	66.3%	58.1%	0.272	66.2%	58.3%	0.329

χ^2 検定 *** p<0.001. ** p<0.01. * p<0.05. † p<0.10

IV-3のように、離脱型と部活・行事型において「勉強と部活動の両立が大切である」意識と部活仲間志向の関係が有意であった。この両クラスターに共通する特徴は、授業場面へのコミットメントの低さである。このことは、「両立の大切さ」をいかに捉えるかで解釈はわかる(次節でふれる)。

一方、「サボることはよくない」という規範意識については、離脱型において部活仲間志向と関係が有意である。離脱型においては、サボることを否とする価値観が、生徒を部活の仲間づくりへと向かわせている。相互の規範意識が彼らの部活動参加を支えているのかもしれない。

補足として、本節で扱った三種の意識とは別であるが、「がんばればたいていのことはできる」という、自己有能観の意識と部活仲間志向との関係が行事型にのみ有意であった。それは、がんばればできると思うように、非部活仲間志向の方向で関係が有意となった。部活動に対して低コミットである彼らにとって、がんばればできるという意識は活動自体の不得意さといまわって、逆方向に効き、仲間同士に集わせるようにみえる。他のクラスターとのちがいで特筆に値した。

まとめとして、各クラスターにおける部活仲間志向と関係が有意である意識を取り出して一覧にしたものが表IV-4である。これらの意識について、共通に持つ生徒同士が、部活動のなかで部活仲間を形成しているわけである。

D コミットメントクラスターからみる部活仲間志向の相違の含意

上述のように、各クラスターごとに、部活仲間志向に関係する意識のちがいを整理してきた。そこで、クラスターごとにとらえることで得られた知見を整理しその含意を考察する。

本来、部活動への参加率や、あるいは部活の活動内容の得意・不得意で考えるならば、その活動が得意であり、参加率が高い生徒たち(ここでは全般型と部活・行事型が該当)は、一般的に、「部活動がうまくいっている生徒たち」と括られうる。一方、不得意であるものの比率が高く、部活動不参加者も見受けられる生徒たち(行事型と離脱型)は、「部活動がうまくいっていない生徒たち」と括られうる。だが、彼らを学校コミットメントのクラスターでみなおすことにより、そのなかでのさらなる分化がとらえられた。

一見、部活動がうまくいっているとみえる全般型と部活・行事型との最たるちがいは、両立は大切である

表IV-4 部活仲間志向と関連する各意識

<p><全般型></p> <ul style="list-style-type: none"> (・楽しみは活動) ・友人を得られる ・精神的に強くなれる ・礼儀正しくなれる (・進学や就職に役立つ) 	<p><部活・行事型></p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しみは活動 ・友人を得られる (・精神的に強くなれる) ・礼儀正しくなれる ・両立は大切
<p><行事型></p> <ul style="list-style-type: none"> ・友人を得られる ・上達できる[-] ・進学・就職に役立つ[-] ・がんばればできる[-] 	<p><離脱型></p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しみは活動 ・友人を得られる ・上達できる ・精神的に強くなれる (・礼儀正しくなれる) ・両立は大切 ・サボることはよくない

注：[-]は、非部活仲間志向に関係が現れるもの
注：()は、10%水準で有意、ほかはすべて5%水準で有意

とする意識が、部活・行事型においてのみ部活仲間志向に関係したことである。全般型は、学校の諸場面において最もコミットする場面が多岐にわたる生徒たちであり、部活・行事型と比べると、学業面へのコミットメントで決定的に異なる。全般型にとって、学業の両立はある程度の自明の日常的な姿勢として共有されるものであり、生徒の部活仲間形成を分かち意識とはなりえなかったと考えられる。全般型は、あくまでも、授業場面へのコミットの高さにおいてうまくいっている生徒たちである。ここでいう「両立」とは、学業面で好成绩を残すという結果を重視したものではなく、学業に向きあう姿勢である。その意味で彼らは、その意識が人間関係に反映されていない。一方、その「両立」を意識するのが部活・行事型と言い表せる。彼らにとって「両立」は、日頃周囲からも意識させられ、自らも学校生活の目標として意識しているものの、授業への向き合い方と部活動への取り組みが、引き合うものとなっていないのであろう。そのズレの意識が、同士としての連帯感となって互いに仲間として結びつける要因になっている⁶⁾。一方、部活動がうまくいっていないとみえる行事型・離脱型では、その傾向のちがいははなはだしい。

むしろ今回の分析で、他の三つのクラスターに比べてもっとも固有の特徴を示したのが行事型であった。部活動へのコミットメントが低いということだけでは括れない生徒集団の分化がここに現れている。彼らの部活動への意識は、技能上達や内面性など、一般的に

考えられている期待感において、それぞれに他のクラスターとは逆の方向で反応が現れる。そのことが、彼らが基本的に部活動という場を必要としていないことを意味するのか、あるいは彼らの思い描く参加したくなる部活動というあり方が別にあるのか、その点を丁寧にとらえる課題が指摘できる。部活動に意味を見だしにくいまま、所与の場として参加しかねている生徒たちを、部活動への参加を促すよう意識の変化を促す対処の模索が考えられる一方で、彼らの現状の参加の在りようを今一度問い直して、そこに別の意義を再発見していくような問題への対峙の仕方も考えていくべきであろう。

部活動内にみられる生徒の分化をよりきめ細かくとらえていく上で、今回のクラスターのような、学校生活と部活動とを絡めた視点が有効であったといえよう。

E 部活以外の仲間関係による考察

ここまでみてきたように、部活動をめぐる仲間関係について、行事型の特異性が際だっている。だが上述したように、生徒は、部活動以外の場面でも仲間をつくる契機を多様に持つ。そこで、部活仲間以外にも考えられる仲間関係の視点から、行事型にみる分化の差異を補足的に考察しておきたい。

全般型においては、部活動でおしゃべりを楽しむものと、「(仲間の)メンバーが決まっている」との関係が有意であった($p=0.002$)。友人に対するコミュニケーション欲求の強さであろう、活動をうまくこなしながらも、おしゃべりが楽しくてしかたがないのかもしれない。一方、行事型においても、メンバーの固定性と有意な関係が、おしゃべりを楽しむものにみられる($p=0.002$)。彼らは活動中におしゃべりでもしていないといられないのではないだろうか。少なくとも、その行為の持つ意味が全般型と同じとは考えにくい。このメンバーの固定性は、部活動をサボるのはよくないこと($p=0.023$)と負の方向で関係が有意に現れる。サボることはよくないと、本来生徒たちを参加する方向で効かせる価値意識も、行事型においては意味が異なる。部活動とともにサボることをいとわない価値意識が、互いを固定的に結びつけている。ひいてはサボり仲間を形成するのであろう。

一方他の型と異なり、行事型は、両立意識が、部活仲間ではなくクラスの仲間に向かわせる方向で関係が明確に有意となる($p=0.025$)。勉強と部活動の両立を重視しながらも、その仲間づくりがクラスメートに向か

うという矛盾は、彼らの部活動に対する拒絶姿勢ではなく、むしろまだ現実化していない期待や願望が潜んでいるようにみえる。

行事型にとって、友人関係としての仲間のつくり方は、明らかに他のクラスターとは異なっている。おそらくさらなる分析の視点を加えることで、他のクラスターにおいてもその友人関係の結ばれ方のちがいがより鮮明にとらえられることになるだろう。その過程において、単なる生徒間の友人関係のみならず、彼らをとりにまく学校生活の諸場面への機能や意味づけも再考する必要が出てくるであろう。そうした視点でとらえていくことが、学校生活とそこでの生徒たちの在りようを把握するうえで不可欠とさえ考えられるのである。

F まとめと課題

学校場面への関わりかたのちがいは、部活仲間集うものの意識の持ち方のちがいとなって現れている。とくに行事型の抱く非部活仲間志向は、彼らの部活参加の脆さが現れている。今後起こりうる学校諸場面における変化は生徒へ影響し、その友人関係の持ち方にも変化を引き起こすと考えられる。部に入っているから部活仲間を組むのが自明なわけではない。学校場面での関わりかたが、彼らの人間関係の築きかたにも影響している。友人関係の現れについて、その関係を成立させている彼らの意識や、その背景となる学校生活の意味づけかたのちがいに着目する観点が必要であろう。

(注)

- 1) たとえば、志水・徳田らによる中学校のエスノグラフィーのなかでも、部活動における仲間の支えの意義付けが重要な要素として描かれている(志水・徳田 1991, p.181-186)
- 2) 小浜は、学校において、クラスメイトとして集うことの偶然性を視野に入れて、学校組織のなかで中学生たちが「帰属なき帰属の中で、自分と全体との関係に意味を与える作業を模索する」と表現しているのは示唆深い。(小浜 1985)
- 3) Duckは、友人関係の機能として、帰属感・同盟感、心理的な基準、コミュニケーション欲求、物理的・心理的援助、自尊心の維持の五点、と、これらが人格の支えとなり統合に役立つことを要件として挙げている。
- 4) 質問紙上、「ふだん一緒にいる友だちグループはおもにどんな人たちですか」との問いに対し、「同じ部活の人である」以外にも、個別の設問として、「同じクラスの人である」「小学校からの友人である」「同じ趣味をもっている人である」「同じくらの成績である」「メンバーはいつも決まっている」を用意した。

これら計6つの設問は、それぞれについて「はい いいえ」で回答する方式であり、排他的なものではない。参考までに、「同じクラスの人」と答えたものは76.8%、「同じ小学校出身者」は53.0%、「同じ趣味を持つ人」は47.9%、「同じくらいの成績」は28.8%、「いつも決まっている」は65.0%であった。

- 5)ここでは、活動や試合を1、おしゃべりを0として、回答を処理している。したがって「活動や試合ではない」ものは「おしゃべり」を選ぶことと同義となる。
- 6)勉強でがんばれているものが、ひきあうだけ部活動にも力を入れようとするのか、あるいは、部活動にがんばっているものなかで、勉強にも力を入れなければと思っているものなのか、今回の分析ではそのちがいは明らかにできなかったが、その点が課題の一つに残された。

V 部活動とスポーツ・文化的活動の機会 —出身家庭に係る条件に注目して—

A はじめに

本章では、中学生がスポーツや文化的な活動に関わりをもち、コミットしていく過程に対して、学校教育で部活動が組織化されていることがどのような意義をもっているかを明らかにする。先述のように、2002年度から完全実施される新しい教育課程でクラブ活動が廃止される一方、部活動については社会体育など地域社会との連携が模索されている。こうした動きは、われわれ研究グループが検討している多元的學校文化モデルの重要な一要素である部活動のあり方に転換をせまる可能性をもつものである。本稿は、この部活動の移行期に臨み、部活動や学校生活に今後どのような変化が生じるのかを予期的に明らかにしようとするものであるが、このなかで本章は、スポーツや文化的活動の機会を組織的に提供してきた場として部活動と学校教育を考察するものである。

一般にスポーツや文化的活動への関わりを規定する要因として、出身家庭のそうした活動への志向性が重要であると指摘されてきた¹⁾。われわれも、第一に部活動を通じた中学生のスポーツや文化的活動への関わりが家庭の志向性によって分化していることを確認し、第二に部活動が学校教育で組織化されていることにより、その家庭の志向性に由来する差異が縮減されていることを指摘した(西島他 1999)。しかしわれわれの調査研究では第一に、学校以外のクラブや施設でのスポーツ・文化的活動の経験が基本的に除外されており、第二に、出身家庭の物質的豊かさという一般的な条件を分析の視野に入れられておらず、第三に、対象が東京都23区内の中学校のみであったから、地域性

による違いが捉えられていなかった。

これらと関わって第四に、中学生のスポーツや文化的な活動との関わりが、基本的に彼ら個人の意識や行動のパターンの問題として捉えられており、それらの活動に関わりをもっていく機会の問題として捉える視点は希薄であった。先行研究を含め潜在的にはこうした視点が皆無だったわけではないが、今日この視点を強調しておくことが特に重要になっているのは、この度の部活動の移行期の帰結として、十分な配慮がなされないままさまざまな活動の機会のあり方が変化する可能性があるからであり、第三章や第四章で論じられたような、中学生の学校への関わりや学校適応のあり方や友人関係のあり方にも変化が生じる可能性があるからである。

こうした問題意識から、本章では学校外での活動の機会や出身家庭の物質的豊かさや地域性を視野に入れて中学生のスポーツ・文化的活動の実態について検討していく。

B 部活動への関わり・コミットメント

1 部活動への参与とコミットメント

本節では、所属している部の活動との関わりが生徒によって違ってくるのはなぜかを、出身家庭のおかれた条件を中心に検討していく。はじめに、調査を実施した中学2年次に、どれくらいの生徒がスポーツや文化的活動に関わっているか、またどのような場所で関わっているかを確認しておこう。まず組織的なスポーツ活動に参加しているのは全体の約7割で70.4%であった。そのなかでみると、スポーツとの関わりがもっぱら中学校の運動部に依存するのは84.2%に達していた。文化的活動については全体の27.9%が関わりをもっている。この約3割の生徒のうち、学校の文化部でだけ活動している生徒はそのほぼ半数の53.4%で残りの半数は学校外に活動の場を持っていた。ただし、全体のなかでみれば、学校の部活動以外に活動の場を有する生徒はスポーツについては11.5%、文化的活動についても13.0%にとどまっており、ともに約1割に過ぎない。

詳細なデータは省略するが、小学校高学年の頃を入れるとはるかに多くの生徒が学校外でスポーツや文化的な活動の場をもっていた。それと比較すると、中学生にとって、スポーツ・文化的活動の場としての比重は学校の部活動に移行・集中しており、学校外での活動の比重は限られたものであることは、その是非はともかく、実態としては否定しがたいのである²⁾。

それでは、この部活動への関わり方が出身家庭に係る条件によってどう異なっているかを、参加頻度や意識面・行動面でのコミットメントを指標に検討しよう。出身家庭に係る条件として用意した変数は、①おもにスポーツ経験を規定すると考えられるもの、②おもに文化的活動の経験を規定すると考えられるもの、③どちらの経験も規定すると考えられるもの、④現在やっている部の活動との関わりを規定すると考えられるもの、あるいは運動部員であればスポーツ・運動一般への関わりを規定し、文化部員であれば文化的な活動への関わりを規定すると考えられるものの4つに大別される。「保護者の運動への志向性」は①、「保護者の芸術・文化への志向性」は②、「保護者の支援」は③、同じ活動の「経験ある保護者」や「きょうだい」がいるかどうかは④に該当する³⁾。

表V-1によると、経験ある保護者やきょうだいがいる方が、保護者の支援や活動への志向性が強い方が平日放課後の活動にほとんど毎回参加し、部活動にも力を入れ(以上2つは芸術・文化への志向性とは5%水準で有意な関連はない)、部活動が好きだと答えている。平日の早朝や土曜・日曜の活動への参加頻度についての詳細なデータは、活動自体がない部が少ないこともあって省略するが、それについてもほぼ同じ傾向であった。98年度調査と同様、出身家庭の環境によって部の活動への関わりは異なるということである。

この背後には、第一に保護者が自身の志向することを子どもにもやらせたいと考える、第二に保護者やきょうだいの行動傾向が子どもにとってモデルとなり、あるいは保護者の支援のもと子ども自身の活動の志向性が強められる、第三に子どものその志向性を保護者が是認しやすい、といったメカニズムが働いていることがうかがわれる⁴⁾。

2 部の活動への関わり・履歴・機会

前項では出身家庭に係る条件によって部活動への関わり方が違っていることを確認した。この問題を検討するうえで考慮すべきものの一つに中学入学前の活動履歴がある。小学校の部活動や地域での活動経験がある方が、当該活動への関わり方が強いことは容易に考えられることである。実際、データは省略するが、活動履歴(中学入学前からやっていた/いなかった)と部活動への関わり方をクロスさせると統計的に有意な関連がみられる。さらに、中学入学前の活動履歴自体が出身家庭に係る条件によって異なることをふまえてそれらの条件で統制してみても、結果は同じだった。出

身家庭に係る条件は部活動への関わりに直接、また先行する活動履歴を通じて間接的に影響しているのであり、このことは前回調査の知見と整合的である⁵⁾。

このメカニズムのなかで、部活動をめぐるこの度の一連の変化の影響が及ぶと予想されるのは、部員の活動履歴の構成であり、それに伴う活動機会の格差パターンである。そこで以下では、この機会の格差パターンに焦点化し、出身家庭に係る条件によって活動の機会がどう異なるかを検討していく。

はじめに中学入学前に現在所属する部の活動を行ってきた生徒がどのくらいいるかを確認しておこう。当該活動を中学入学前から学校以外の場合や小学校の部活動で行っていたかを尋ねた結果によると、現在部でやっていることをはじめたのは中学校に入ってからであるという生徒は運動部で46.6%、文化部では55.3%であった(うち中学入学後、学校外でもやっているのは、それぞれ4.4%、1.9%)。運動部、文化部ともにほぼ半数が中学校から当該活動と関わりをもったのである。残り約半数の中学入学前からの経験者の内訳をみると、活動の場がもっぱら小学校の部活動であったのは運動部で17.0%、文化部で23.2%である(うち中学では学校外でもやっているのはそれぞれ1.7%、0.5%)。したがって、活動履歴が小中あわせてもっぱら学校の部活動に依存する生徒は運動部で57.5%、文化部では76.1%に達する。この点でも、学校教育が提供するスポーツ・文化的活動の場としての部活動の比重の大きさを確認できるのである。

3 活動履歴と出身家庭に係る条件

出身家庭に係る条件によって現在部でやっている活動の履歴が異なることは前項でも言及したが、改めて詳細に検討していこう。表V-2は現在部でやっている活動の履歴が出身家庭に係る条件によってどう違うかをみたものである。前項の分析で用いた「保護者の支援」は、ここでの分析で用いるのは妥当でないと考えられるので除外してある。逆に追加した変数は、出身家庭の「物質的豊かさ」⁶⁾と学校所在地の「地域性」である。これらは先の分類でいえば③スポーツと文化的活動のどちらの経験も規定すると考えられるものである。スポーツや文化的活動には費用がかかる場合が少なくない。したがって、保護者が子どもにやらせたいと思ったにしろ、子どもの方がやりたいと思ったにしろ、それを実現できるかどうかは家庭の物質的豊かさにあらわれる家庭の経済力に左右される部分があると考えられる。また、都市部と郡部では施設・設備や組織や指導者の分布に偏りがあり、スポーツや文化的な

表V-1 部活への参与・コミットメント×出身家庭に係る条件

	平日放課後の活動に毎回参加	p値	部活に力を入れている(かなり+まあ)	p値	部活動が好きだ(とても+まあ)	p値	n ^{※3}
経験ある保護者		0.000 **		0.000 **		0.000 **	
いる	74.7%		86.9%		85.7%		922
いない・わからない	66.9%		78.0%		77.6%		2730
経験あるきょうだい		0.000 **		0.000 **		0.000 **	
いる	73.8%		86.5%		84.9%		1060
いない・わからない	66.8%		77.7%		77.7%		2561
保護者の支援		0.000 **		0.000 **		0.000 **	
強い方	76.9%		88.7%		86.6%		1906
弱い方	60.2%		71.1%		72.3%		1822
保護者の芸術・文化への志向性 ^{※1}		0.257		0.077		0.043 *	
強い方	57.2%		72.2%		76.9%		295
弱い方	53.0%		66.1%		70.3%		472
保護者の運動への志向性 ^{※2}		0.015 *		0.000 **		0.000 **	
強い方	74.4%		85.9%		84.0%		1814
弱い方	70.2%		79.4%		78.2%		1064

χ²検定 ** : p<0.01 * : p<0.05

※1 : 文化部員のみで集計。

※2 : 運動部員のみで集計。

※3 : 表側の変数を単純に集計した値を表示している。

表V-2 活動履歴×出身家庭に係る条件

表V-2-1(a) 運動部員のみ

	運動部の活動・中学以前					合計 (n)	学校だけでやっている (d)	中学校だけでやっている (e)	A		B	
	学校以外でも小学校の部でもやっていた	学校以外でやっていた	小学校の部でやっていた (a)	中学で始めたが、球-ツはしていた (b)	中学で始め、球-ツはしていた (c)				p値	オッズ比	p値	オッズ比
物質的豊かさ									0.001**		0.032*	
上 (r.g.)	16.7%	19.1%	16.7%	22.3%	25.3%	100.0% (677)	56.0%	41.2%				
中	13.4%	18.1%	18.2%	20.1%	30.4%	100.0% (1146)	63.4%	46.9%	1.361		1.261	
下	11.2%	16.4%	19.9%	18.2%	34.2%	100.0% (828)	65.3%	47.2%	1.479		1.276	
経験ある保護者									0.000**		0.000**	
いる (r.g.)	16.6%	21.6%	17.1%	18.0%	26.7%	100.0% (735)	53.3%	38.7%				
いない・わからない	12.2%	16.3%	18.9%	21.1%	31.6%	100.0% (1892)	65.7%	48.4%	1.678		1.486	
経験あるきょうだい									0.000**		0.000**	
いる (r.g.)	18.8%	24.4%	20.8%	14.5%	21.5%	100.0% (813)	50.1%	31.4%				
いない・わからない	11.1%	14.7%	17.3%	22.6%	34.2%	100.0% (1799)	67.6%	52.0%	2.078		2.367	
保護者の運動への志向性									0.000**		0.000**	
強い方 (r.g.)	14.4%	19.9%	18.6%	21.1%	26.0%	100.0% (1677)	58.6%	42.2%				
弱い方	12.1%	14.2%	17.7%	18.5%	37.4%	100.0% (964)	68.0%	51.4%	1.501		1.449	
地域									0.106		0.061	
大都市部 (r.g.)	15.6%	17.5%	17.6%	21.1%	28.3%	100.0% (1058)	59.9%	44.2%				
中小都市部	10.7%	19.5%	16.3%	21.4%	32.0%	100.0% (1108)	62.7%	48.1%	1.125		1.170	
郡部	15.5%	14.6%	24.5%	14.8%	30.5%	100.0% (485)	65.4%	42.5%	1.265		0.933	
合計 [※]	13.5%	17.8%	18.3%	20.1%	30.3%	100.0% (2651)	62.1%	45.6%				

χ²検定 ** : p<0.01 * : p<0.05

※ 表頭の変数を単純に集計しており、上の表中では除外されている表側変数の「無回答者」を含む。したがって、各クロス表の合計人数の和とは必ずしも一致しない。

d...a+b+cから、中学校では学校外でもやっている者を除いた値。

e...b+cから、中学校では学校外でもやっている者を除いた値。

A...d(=1) / それ以外(=0)の2値変数を使用。

B...e(=1) / それ以外(=0)の2値変数を使用。

オッズ比は、A、Bのそれぞれで値が「1」になる確率について、reference group (r.g.)に対してとったもの。

活動に関わりをもつ客観的な機会に地域間格差がある背景の一つになると考えられる。

まず、運動部員の活動履歴をみよう。d欄は現在所属している部の活動との関わりが、小学校を含めてもっぱら学校の部活動に依存する程度を示している。これによれば、出身家庭が物質的に豊かでないほど、また、経験ある保護者やきょうだいがいない方が、保護者の運動への志向性が弱い方が、d欄の値は高くなっている。

次に、e欄は、小学校を除き、中学校の部活動に対して、現在所属している部の活動との関わりがどの程度依存しているかを示している。これについても、出身家庭が物質的に豊かでないほど、また、経験ある保護者やきょうだいがいない方が、保護者の運動への志向性が弱い方が、e欄の値は高くなっている。

文化部員の活動履歴についても数値の差自体ではほとんど同様の傾向が認められるが、5%水準で統計的に有意なものは限られている。

つまり、おおむね出身家庭に係る条件について恵まれない状況におかれた生徒ほど、学校教育が提供する活動の機会の枠内でだけ、さらには中学校の部活動が提供する機会の枠内でだけ、現在所属する部の活動との関わりを築いてきており、学校の部活動に依存する割合が高いということである。

予想に反して地域別に一貫した傾向がみられない

が、その理由の一つには部の活動には学校の部活動でしかほとんど経験できないものが少なからず含まれており、客観的な機会の格差がそれほど大きくならずにいるのではないかと考えられる。このことは部の活動の履歴だけからでは捉えられない格差が存在する可能性を示唆している。これに関わって指摘しておきたいのは、c欄からわかるように、地域性を除き、出身家庭に係る条件について恵まれない状況におかれた生徒ほど、中学入学前にはスポーツや文化的な活動の経験がなかった傾向がみられることである。そこで、所属している部の活動以外も含めて、スポーツや文化的活動一般の機会に対して学校の部活動がどのような役割を果たしているかが問題になる。次節ではこれをみていこう。

C スポーツ・文化的活動の機会を提供する学校教育
1 スポーツや文化的な活動の経験と部活動

前節では、部活動は中学生がスポーツや文化的な活動を行う中心的な場であること、現在所属している部の活動とは学校での部活動を通じて関わりをもつようになった生徒が相当の割合を占めること、そしてその割合は出身家庭にかかる条件について恵まれない状況におかれた生徒ほど大きいことが明らかになった。では、このような役割を果たしている部活動は、スポーツや文化的な活動一般の機会の配分にどのような影響

表V-2-1(b) 文化部のみ

	文化部の活動・中学以前					合計 (n)	学校だけでやっている (d)	中学校だけでやっている (e)	A		B	
	学校以外でも小学校の部でもやっている	学校以外でやっていた	小学校の部でやっていた(a)	中学で始めたが、文化的活動はしていた (b)	中学で始め、文化的活動はしていなかった (c)				p値	オッズ比	p値	オッズ比
物質的豊かさ									0.022*		0.628	
上 (r.g.)	14.5%	6.7%	21.2%	29.7%	27.9%	100.0% (165)	74.5%	53.9%				
中	12.8%	4.0%	25.3%	26.9%	31.0%	100.0% (297)	81.0%	56.6%	1.459		1.115	
下	6.9%	5.8%	27.0%	10.8%	49.4%	100.0% (259)	85.3%	58.7%	1.986		1.216	
経験ある保護者									0.247		0.126	
いる (r.g.)	15.2%	5.1%	27.3%	25.3%	27.3%	100.0% (99)	76.8%	49.5%				
いない・わからない	10.5%	5.3%	24.7%	21.2%	38.3%	100.0% (619)	81.7%	57.7%	1.349		1.392	
経験あるきょうだい									0.649		0.010*	
いる (r.g.)	13.6%	1.5%	37.1%	18.9%	28.8%	100.0% (132)	82.4%	46.6%				
いない・わからない	10.6%	6.1%	22.3%	22.3%	38.7%	100.0% (587)	80.7%	58.9%	0.893		1.642	
保護者の芸術・文化への志向性									0.005**		0.077	
強い方 (r.g.)	15.8%	4.0%	24.2%	26.7%	29.3%	100.0% (273)	75.7%	52.6%				
弱い方	8.3%	6.1%	25.3%	18.8%	41.5%	100.0% (446)	84.3%	59.3%	1.724		1.313	
地域									0.895		0.745	
大都市部 (r.g.)	11.7%	5.1%	23.1%	24.5%	35.5%	100.0% (273)	80.5%	58.1%				
中小都市部	11.9%	4.4%	24.7%	20.3%	38.6%	100.0% (295)	81.0%	56.8%	1.033		0.948	
郡部	8.5%	7.2%	28.8%	19.6%	35.9%	100.0% (153)	82.4%	54.2%	1.134		0.853	
合計	11.1%	5.3%	25.0%	21.8%	36.9%	100.0% (721)	81.1%	56.8%				

表V-3 スポーツや文化的活動の機会×出身家庭に係る条件×性別
表V-3-(a) スポーツの機会

		スポーツの機会				(n)	A		B			
		機会あり	内訳 学校で	両方で	学校外で		合計 (n)	オッズ比	p値	オッズ比	p値	
物質的豊かさ												
男子	上	95.9%	30.1%	65.2%	4.7%	100.0%	(489)	(510)	2.285	0.000**	2.183	0.000**
	中	95.6%	36.8%	59.0%	4.2%	100.0%	(842)	(881)	2.123		1.633	
	下 (r.g.)	91.1%	47.0%	49.4%	3.5%	100.0%	(625)	(686)				
女子	上	81.9%	44.4%	45.5%	10.1%	100.0%	(385)	(470)	1.557	0.010*	1.642	0.000**
	中	78.5%	50.9%	38.5%	10.6%	100.0%	(633)	(806)	1.256		1.237	
	下 (r.g.)	74.4%	54.7%	35.8%	9.8%	100.0%	(461)	(620)				
保護者の運動への志向性												
男子	強い方	95.9%	32.5%	63.3%	4.2%	100.0%	(1173)	(1223)	2.062	0.000**	1.939	0.000**
	弱い方 (r.g.)	91.9%	47.0%	49.0%	4.0%	100.0%	(774)	(842)				
女子	強い方	82.9%	48.2%	43.4%	8.4%	100.0%	(926)	(1117)	1.990	0.000**	1.539	0.000**
	弱い方 (r.g.)	70.9%	53.5%	33.1%	13.3%	100.0%	(540)	(762)				
地域												
男子	大都市部	94.5%	34.9%	59.1%	6.0%	100.0%	(348)	(897)	0.866	0.395	1.411	0.011*
	中小都市部	93.4%	39.7%	56.9%	3.4%	100.0%	(773)	(828)	0.714		1.138	
	郡部 (r.g.)	95.2%	44.2%	54.9%	0.9%	100.0%	(335)	(352)				
女子	大都市部	80.5%	46.1%	42.0%	11.9%	100.0%	(588)	(730)	1.686	0.002**	1.798	0.000**
	中小都市部	78.5%	51.6%	39.5%	8.9%	100.0%	(661)	(842)	1.491		1.437	
	郡部 (r.g.)	71.0%	57.8%	33.0%	9.1%	100.0%	(230)	(324)				
性別												
	男子	94.2%	38.4%	57.5%	4.1%	100.0%	(1956)	(2077)	4.581	0.000**	2.187	0.000**
	女子 (r.g.)	78.0%	50.4%	39.5%	10.1%	100.0%	(1479)	(1896)				
合計 ^{a)}		86.5%	43.6%	49.7%	6.7%	100.0%	(3516)	(4066)				

χ²検定 ** : p<0.01 * : p<0.05

※表頭の変数を単純に集計した値である(回答不十分なものは除外)。したがって、各クロス表の合計人数の和とは必ずしも一致しない。

A 機会あり(=1)／機会なし(=0)の2値変数を使用。

B 学校外で機会あり(=1)／学校外でなし(=0)の2値変数を使用。

オッズ比は、A、Bのそれぞれで値が「1」になる確率について、reference group (r.g.)に対してとったもの。

を与えているのだろうか。この検討に入る前に、中学生がどれくらいスポーツや文化的活動を経験してきているかをまず確認しておく。

スポーツクラブや習い事など学校外での活動経験(小学校高学年の頃と調査時点に分けて尋ねた)、中学校での部活動への加入状況を尋ねた質問を併せてみたところ、何らかのかたちで組織的にスポーツを行ったことがある生徒は83.5%(回答不十分3.3%)であり、文化的活動についてはその半分程度で40.6%であった⁷⁾。そのなかだけでみて、学校の部活動に参加することによってはじめてスポーツ・文化的活動に関わりをもった生徒は少なくともスポーツで43.6%(全体でみると37.7%)、文化的活動で31.9%(同じく全体では13.6%)だった⁸⁾。半数まではいかないものの、相当の割合の生徒が学校の部活動によってスポーツや文化的活動に関わりをもったのである。

2 出身家庭に係る条件による活動経験の格差

前項で学校の部活動が相当数の生徒にスポーツや文化的活動に関わる機会を提供していることを確認した。これを逆にいえば、それ以外の生徒は学校外でそうした活動を経験しているということであり、しかもその大半は中学入学前から活動をはじめていた。それでは、このようなスポーツ経験や文化的活動の経験の違いはなぜ生じるのだろうか。

表V-3は生徒の出身家庭に係る条件によって、スポーツや文化的活動の経験がどう違うかをみたものである。前節の分析で用いた「保護者の支援」、「経験ある保護者」や「きょうだい」がいるかどうかは本節で用いるのは妥当でないから除外した。

表にはスポーツと文化的な活動のそれぞれについて、「機会あり／機会なし」の合計が100%になる数字と、「機会あり」のなかだけで、「学校で／学校外で／両

表V-3-(b) 文化的な活動の機会

		文化的活動の機会					(n)					
		機会あり				合計 (n)		A		B		
		内訳	学校で	両方で	学校外で			オッズ比	p値	オッズ比	p値	
物質的豊かさ												
男子	上	26.0%	26.4%	8.5%	66.1%	100.0%	(129)	(497)	2.023	0.000**	6.145	0.000**
	中	17.8%	45.8%	8.5%	45.8%	100.0%	(153)	(858)	1.247		2.796	
	下 (r.g.)	14.8%	75.0%	3.0%	22.0%	100.0%	(100)	(674)				
女子	上	79.1%	11.0%	29.4%	59.6%	100.0%	(374)	(473)	2.809	0.000**	5.880	0.000**
	中	71.5%	24.4%	25.6%	50.0%	100.0%	(570)	(797)	1.862		2.914	
	下 (r.g.)	57.4%	49.9%	18.9%	31.3%	100.0%	(355)	(618)				
保護者の芸術・文化への志向性												
男子	強い方	28.8%	37.7%	6.9%	55.3%	100.0%	(159)	(552)	2.310	0.000**	2.897	0.000**
	弱い方 (r.g.)	14.9%	52.8%	7.3%	39.9%	100.0%	(218)	(1466)				
女子	強い方	79.0%	19.8%	31.3%	49.0%	100.0%	(496)	(628)	2.134	0.000**	2.268	0.000**
	弱い方 (r.g.)	63.8%	32.2%	21.0%	46.9%	100.0%	(796)	(1248)				
地域												
男子	大都市部		42.0%	8.8%	49.2%	100.0%	(193)	(871)	1.844	0.001**	2.405	0.000**
	中小都市部		50.3%	4.9%	44.8%	100.0%	(143)	(814)	1.380		1.548	
	郡部 (r.g.)		56.5%	6.5%	37.0%	100.0%	(46)	(344)				
女子	大都市部		20.6%	26.6%	52.8%	100.0%	(504)	(724)	1.038	0.810	1.441	0.001**
	中小都市部		31.4%	22.5%	46.2%	100.0%	(574)	(843)	0.968		1.024	
	郡部 (r.g.)		33.0%	27.1%	39.8%	100.0%	(221)	(321)				
性別												
男子		18.8%	46.9%	7.1%	46.1%	100.0%	(382)	(2029)	0.105	0.000**	0.112	0.000**
女子 (r.g.)		68.8%	27.5%	24.9%	47.7%	100.0%	(1299)	(1888)				
合計		42.6%	31.9%	20.7%	47.4%	100.0%	(1708)	(4007)				

方で」の合計が100%になる数字(灰色の部分)の2種類を掲げた。前者の数字からみていこう。まず、男女別の集計結果から分かるように、男子の方にスポーツ経験者が多く、女子には文化的活動の経験者が多い。中学入学前の子どもの時期については、本人の意識・意欲だけでなく、保護者の意向が重要な要因となっていると考えられる。したがってこの男女差は保護者の期待や意向が、男の子と女の子とで異なっていることを反映しているのであろう。これをふまえて男女別に集計している。

出身家庭が物質的に豊かであるほど、スポーツについても文化的な活動についても活動経験ありの割合が男女とも高くなっている。また、保護者の運動への志向性、芸術・文化への志向性が強い方が、それぞれスポーツ、文化的活動の経験ありの割合が高い。これらの条件で相対的に恵まれない状況におかれた生徒ほどスポーツや文化的活動に関わる機会が乏しいといえる。地域性に関しては、女子についてはスポーツ経験の方で、男子については文化的活動経験の方で郡部、中小都市、大都市の順で経験ありの割合が増加する傾向が認められる。スポーツや文化的な活動の機会に関

して、全体としてみれば、地域間格差は限定的なものとなっているのである。統計的に関連が認められるものについて割合をみると、スポーツの機会ありの男子生徒は各変数の最も恵まれないカテゴリーで約90%なのに対し、もっとも恵まれたカテゴリーだと約95%、同様に女子生徒では約80%に対して約70%である。文化的活動についても同じように数字を並べると、男子で25%前後に対して15%前後、女子で約80%に対して60%前後となっている。

表V-4-(a)は、機会の有無を目的変数にしたロジスティック重回帰分析の結果であり、これまでの分析をふまえ男女別に計算してある。他の変数を調整して各独立変数独自の効果を確認しても、機会の有無に影響する変数についてクロス表分析とほぼ同じ結果がえられている⁹⁾。一貫して機会との関係がみられるのは保護者の志向性であり、いずれの場合もオッズ比が2に近くなっている。保護者の活動への志向性によって、子どものスポーツや文化的活動の機会が左右されるところが相対的に大きいことが分かるのである。

3 スポーツ・文化的活動の機会と部活動

現在中学校の部活動が移行期にあると考えられるこ

とは本稿の指摘するところである。中学校の部活動の今後を考える場合、前項でみた格差パターンに対して部活動がどのような関わりをもっているかが問題になる。前節で指摘したとおり、学校の部活動が提供しているスポーツや文化的活動の機会は決して小さくない。したがって、部活動の変化は現状の格差パターンに変化をもたらす可能性が十分にあるのである。

先述の通り、表V-3の灰色の部分は活動経験者のなかだけで、どこで活動を経験してきたかの内訳をみたものである。ここで注目したいのは「学校で」の経験しかない生徒である。まず、性別で比較すると、全体的にスポーツ経験者の少ない女子では、スポーツ経験者のなかの50.4%と約半数が学校の部活動ではじめてスポーツに関わりをもったことがわかる。同様に文化的な活動の経験者が少なかった男子については、半数には達しないものの46.9%が部活動ではじめて文化的な活動に関わっているのである。

その他の変数に戻ろう。全体としてはスポーツや文化的活動の機会の格差が限定的なものにとどまっていた地域性を含め、どの条件についても統計的に有意な差がある。家庭の物質的豊かさが低いほど、また大都市部、中小都市部、郡部の順で、スポーツと文化的活動の両方について学校の部活動に依存する割合が大きくなる。また、保護者の運動への志向性が弱い方が、スポーツを経験するのに学校の部活動に依存する割合が大きく、保護者の芸術・文化への志向性が弱い方が、文化的な活動経験が学校の部活動に依存する割合が大きい。各変数でもっとも恵まれないカテゴリーの生徒であると、女子に関して保護者の芸術・文化への志向性と地域性については約30%の生徒が、それ以外ではおよそ半数以上に達する生徒が学校の部活動に依存しているのである。

表V-4-(b)が学校外での活動機会の有無を目的変数にしたロジスティック重回帰分析の結果である。ここでも他の変数を調整した結果はおおむねクロス分析と整合し各独立変数独自の効果が確認される¹⁰⁾。オッズ比をみると、女子のスポーツの機会を除き、おおむね物質的豊かさの値が相対的に大きく、特に文化的な活動では男女とも「上」カテゴリーで5前後である。部活動に参加する機会を除いて考えると、物質的な豊かさによって活動の機会が左右されることがうかがわれるのである。

本節ではスポーツや文化的活動の機会一般の格差、そして学校外での機会の格差を考察してきた。しかしここで明らかになったのは、単に学校の部活動に依存

しがちな層があり、学校外の活動機会に格差があるということではない。ここには出身家庭に係る条件で相対的に恵まれない状況におかれた生徒ほど、部活動を通じて活動の機会を享受しているということが含まれている。このことは、一般的なスポーツや文化的活動の機会の格差が部活動が提供する機会によって縮小している可能性を示唆しているのである。

D まとめ

以上本章では、生徒の出身家庭に係る条件と①部活動への行動・意識両面でのコミットメントの関連、②所属する部の活動の履歴との関連、③スポーツや文化的な活動一般の機会との関連を明らかにしてきた。

本稿の課題に即して、本章の知見が示唆することを格差パターンの二重性に注目して言及しておこう。生徒の所属する部の活動にしても、スポーツや文化的活動一般にしても、第一に全体として出身家庭のおかれた条件による機会の格差があり、第二に学校の部活動以外で活動する機会の格差が存在していた。学校で部活動が組織化されていることによって第二の格差は縮減され、それでもなお残っているのが第一の格差であると考えられる。この格差パターンの二重性のあり方をふまえるなら、子どものスポーツや文化的な活動を地域社会と連携して行う、地域社会へ移行させるといった場合、地域性はもちろん保護者の志向性や社会階層によって子どもの意思から独立した格差が拡大する可能性にも配慮が必要となろう。もちろんスポーツや文化的な活動にふれること自体が絶対的な善であるというわけではないが、部活動への関わり方が学校適応や学校への関わり方を規定していること、また機会を得られる人々に認められる系統的な特徴が属性的なものであることからすれば容易に無視できない問題ではないと考えられる。

<註>

- 1) 文化的な活動の世代間継承については例えば藤田・宮島・秋永・橋本・志水(1987)、宮島・藤田編(1991)、藤田・宮島・加藤・吉原・定松(1992)。スポーツについては、糸野・池田・山口(1979)、多々納・厨(1980)等があるほか、山口・池田(1987)をも参照。
- 2) 本稿では学校が部活動を通じてスポーツや文化的活動に関わる機会を提供していると述べている。しかし、中学生の活動の場が学校の部活動に制約されており、そのために彼らが地域などで活動する「機会」が奪われているという解釈も成り立ちうる。ただし、中学生がスポーツや文化的な活動に関わる

ことができない状況に置かれているわけではないという意味で、本稿の議論も妥当性をもつといえる。

3) 保護者の運動への志向性は、保護者の行動傾向を尋ねた質問で、「スポーツをする(していた)」という項目で肯定的な回答(「とてもあてはまる」「まああてはまる」)を「強い方」、否定的

な回答(「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」)を「弱い方」に分類した。保護者の支援については、「部活動の大会やコンクールを見に来る」という項目で同様の処理をした。保護者の芸術・文化への志向性は、同様の質問で「絵を描いたり、楽器の演奏や合唱をしたりする」「美術展や音楽会に

表V-4 スポーツや文化的活動の機会と出身家庭に係る条件(ロジスティック重回帰分析)
表V-4-(a) 機会あり=1/機会なし=0

	男子					女子				
	B	SE	df	p値	オッズ比	B	SE	df	p値	オッズ比
スポーツの機会										
物質的豊かさ			2	0.001	**			2	0.137	
上	0.681	0.266	1	0.010	*	1.976	0.296	0.156	1	0.057
中	0.713	0.218	1	0.001	**	2.040	0.179	0.129	1	0.163
保護者の運動への志向性	0.624	0.195	1	0.001	**	1.866	0.666	0.114	1	0.000
地域			2	0.468					2	0.002
大都市部	-0.195	0.293	1	0.506		0.823	0.539	0.156	1	0.001
中小都市部	-0.342	0.288	1	0.235		0.711	0.460	0.151	1	0.002
定数	2.297	0.273	1	0.000	**		0.355	0.157	1	0.024
χ^2 , df, p(n)	29.112, 5, 0.000 (2065)					54.265, 5, 0.000 (1879)				
文化的活動の機会										
物質的豊かさ			2	0.003	**			2	0.000	**
上	0.475	0.156	1	0.002	**	1.608	0.901	0.143	1	0.000
中	0.080	0.145	1	0.582		1.083	0.553	0.115	1	0.000
保護者の芸術・文化への志向性	0.738	0.123	1	0.000	**	2.091	0.634	0.117	1	0.000
地域			2	0.012	*				2	0.988
大都市部	0.512	0.181	1	0.005	**	1.668	-0.023	0.149	1	0.880
中小都市部	0.287	0.186	1	0.123		1.333	-0.011	0.145	1	0.939
定数	-2.225	0.184	1	0.000	**		0.182	0.142	1	0.202
χ^2 , df, p(n)	69.882, 5, 0.000 (2018)					92.949, 5, 0.000 (1876)				

表V-4-(b) 学校外で機会あり=1/学校外で機会なし=0

	男子					女子				
	B	SE	df	p値	オッズ比	B	SE	df	p値	オッズ比
スポーツの機会										
物質的豊かさ			2	0.000	**			2	0.018	*
上	0.649	0.124	1	0.000	**	1.913	0.365	0.129	1	0.005
中	0.418	0.105	1	0.000	**	1.519	0.156	0.113	1	0.168
保護者の運動への志向性	0.583	0.093	1	0.000	**	1.792	0.390	0.100	1	0.000
地域			2	0.060					2	0.000
大都市部	0.291	0.130	1	0.025	*	1.338	0.586	0.144	1	0.000
中小都市部	0.132	0.131	1	0.313		1.141	0.413	0.142	1	0.004
定数	-0.516	0.132	1	0.000	**		-1.262	0.154	1	0.000
χ^2 , df, p(n)	91.675, 5, 0.000 (2065)					45.312, 5, 0.000 (1879)				
文化的活動の機会										
物質的豊かさ			2	0.000	**			2	0.000	**
上	1.542	0.239	1	0.000	**	4.672	1.636	0.137	1	0.000
中	0.852	0.237	1	0.000	**	2.343	1.005	0.116	1	0.000
保護者の芸術・文化への志向性	0.801	0.156	1	0.000	**	2.228	0.627	0.106	1	0.000
地域			2	0.012	*				2	0.024
大都市部	0.704	0.257	1	0.006	**	2.022	0.333	0.143	1	0.020
中小都市部	0.395	0.267	1	0.139		1.485	0.087	0.140	1	0.536
定数	-3.875	0.300	1	0.000	**		-1.214	0.146	1	0.000
χ^2 , df, p(n)	111.407, 5, 0.000 (2018)					242.140, 5, 0.000 (1876)				

χ^2 検定 **: $p<0.01$ *: $p<0.05$

※物質的豊かさと地域性の行は1変数としての検定結果。

物質的豊かさ 上:上=1、それ以外=0 中:中=1、それ以外=0

保護者の活動への志向性 強い方=1、弱い方=0

地域 大都市部:大都市部=1、それ以外=0 中小都市部:中小都市部=1、それ以外=0

行く」のどちらかの項目で肯定的な回答があった場合を「強い方」、そうでない場合を「弱い方」に分類した。

経験ある保護者や「きょうだい」については、その有無を尋ねた質問を用い、「現在やっている」と「以前やっていた」を「いる」に、「現在も、以前もやっていない」と「わからない」(きょうだいについては一人っ子も)を「いない・わからない」に分類した。

- 4)ただし、子どもの側からの保護者(親)への影響があることは日本でも報告されている(井手岡他 1991)。
- 5)家庭の物質的豊かさは家庭で所有する財の量を尋ねた質問をもとに3分した。なお、物質的豊かさは社会階層を測る代替指標として用いている。当初われわれ研究グループとしては、保護者の職業や学歴など社会階層を直接に測る指標を調査票に盛り込みたいと考えていた。しかし対象校と調整をすすめるなかで断念した。
- 6)ただし、具体的に用いた仮説・指標は異なる。
- 7)生徒には学校外でどのような活動をしていたか、あるいは、しているかを自由に記述してもらい、調査者の側でスポーツや文化的な活動に分類してアフター・コーディングを行った。部活動についても同様に運動部と文化部に分類し、それぞれをスポーツ、文化的な活動とみなしている。なお、部活動については調査時点ですでに退部した生徒も含む。
- 8)「少なくとも」というのは、小学校での部活動経験について十分には尋ねなかったからである。小学校での部活動経験を含めて考えると、全体としてのスポーツ経験者・文化的活動の経験者も、学校の部活動によってはじめてスポーツや文化的活動にふれた生徒の割合も今回のデータより高くなる可能性は十分にある。
- 9)女子のスポーツの機会に関しては、物質的豊かさについて「上」カテゴリーでは $p=0.057$ と 0.05 をわずかに上回るにとどまるが、変数としては5%水準で有意でなくなる。
- 10)男子のスポーツの機会に関しては、地域性について「大都市」カテゴリーが5%水準で有意だが、変数としては5%水準で有でなくなっている。

VI 移行期における部活動に対する生徒の意向と学校教育の課題

A はじめに

ここまで、Ⅲ章では、生徒の学校生活の諸場面に対するコミットメントの違いから4つの基礎類型を案出して、それらと生徒の分化の関係について考察し、コミットメントする場面が多いほど、自己評価や学制的な秩序への適応が高くなり、進路希望については、学業場面以外の場面に対するコミットメントの強さが進路希望に対する補償効果をもつ可能性があることを明らかにして、多元的學校文化モデルの検証を進めた。Ⅳ章では、生徒の部活動における友人関係の構築の違いについて、部活動に対する意識から分析し、部活動

への適応不適応にも質的な差があることから、同じ部活動仲間志向の生徒でも、さまざまな友人関係の結び方があることを明らかにした。Ⅴ章では、中学校以前・以後の連続的視点から、出身家庭のさまざまな条件の違いによって生徒の部活動やスポーツ・文化的活動にも違いがみられるということ、部活動が学校教育で組織化されているため、その格差を縮減する方向にあるということを示した。

本章では、これまでの知見をふまえて、本論のふたつめの課題である、移行期における部活動改革にあたって検討すべき学校教育の課題としてどのようなものがあるのかということについて、調査データに基づいて考えていくことにしたい。具体的には、現在さまざまに取り組みされている部活動改革のいくつかを取り上げ、社会的に多様な条件下にある中学生が、それぞれの改革に対してどのような意向をもっているのかを検討していく。もちろん、生徒の意向そのものが改革に対する最終審級というわけではない。しかし、前章までに明らかにしてきたように、学校の諸場面に対するコミットメント、友人関係、家庭環境、居住地域といった違いが、中学生の部活動への関わり方に違いをもたらしている。部活動改革に対する生徒の意向の背後にそのような社会的な相違を読み込みながら検討することは十分意味のあることだと考える。

B 部活動改革とその論点

はじめに、移行期にあたって、現在どのような部活動改革が取り組まれており、また、それらの改革を迫るのはどのような議論なのかを整理しておこう。

実際に取り組みが進められている主な部活動改革は、次の5つである。

①「クラブ活動の廃止」：特別活動の内容のひとつだったクラブ活動が廃止されるため、部活動をクラブ活動の代替で行っていた場合、全員参加から自由参加へ参加方法が変わる。

②「自校か他校か」：自校に参加したい部活動がない場合、近隣の学校の当該部活動への参加を認める。2001年5月に全国で初めて京都市でその方針が正式に打ち出された¹⁾。

③「合同部活」：部員数不足で自校だけでは大会やコンクールなどに参加できない学校どうしが合同チームをつくって参加できるようにする。ただし、複数の学校が恒常的に部活動を合同で行うのではなく、大会などに部員数不足が原因で参加できない場合の臨時的な措置である。平成11年度運動部活動運営研究協議会²⁾

で山口県と神奈川県の実践報告がなされるなど、各地のさまざまな部活動で取り組みが始まっている。

④「外部指導員」：教員以外の人でその活動の専門家が指導したり保護者が引率したりすることを認める。学校長の裁量で教員以外の人を指導や引率責任の面で顧問と同等の位置づけの外部指導員として採用することができる。平成11年度運動部活動運営研究協議会で広島市と群馬県の実践報告がなされている。

⑤「学校か地域か」：社会教育や社会体育と連携したり移行したりする。既存の学校体育施設や公共スポーツ施設を総合型地域スポーツクラブの活動の場として活用したり、管理運営を地域スポーツクラブへ委託したりするといった取り組みが提案、模索されている。

これらの改革を迫る議論には、大きく4つの議論が存在している。これまでも随所で言及してきているが、改めて確認しておこう³⁾。

(1)教育課程上の問題と関連して論じられる議論。

新教育課程の理念とその背景に則って展開されている。クラブ活動の廃止は、部活動の成熟と社会教育・社会体育に参加する生徒の増加がその理由だが、クラブ活動の部活代替制度がなくなったことで部活動の法的基盤が失われたため、部活動の存廃をめぐって議論が展開されている。①「クラブ活動の廃止」と⑤「学校か地域か」に関わる議論である。

(2)学校経営上の問題と関連して論じられる議論。

少子化、新規採用教員数の減少と教員の高齢化による顧問教員数不足など、部活動の実際の運営に関して展開されている。少子化の進展は、一定の人数を必要とする団体活動を困難にさせているし、顧問教員数不足は、適切な指導を施すことを困難にさせており、そのような事態にどう対応すべきかという議論がなされている。②「自校か他校か」、③「合同部活」、④「外部指導員」に関わる議論である。

(3)教育改革論と関連して論じられる議論。

学校スリム化論や教育自由化論といった近年の教育改革論のなかで展開されている。学校5日制や学校がこれまで担ってきた役割を家庭や地域に返そうという学校スリム化論のなかで、クラブ活動を廃止して特別活動をスリム化し、部活動を家庭や地域に委託しようという議論がある。教育自由化論では、生徒の興味・関心の多様化に応じて、学校の教育課程に準じた部活動ではなく、より自由に取り組める環境を整備しているという議論がある。①「クラブ活動の廃止」、⑤「学校か地域か」に関わる議論である。

(4)個々の活動上の問題と関連して論じられる議論。

主に運動部活動をめぐってその活動の成果や実績、競技力の向上を図ろうとするような個々の活動上の問題として展開されている。例えば、2000年9月に文部省より提出された「スポーツ振興基本計画」のなかで、国際競技力の向上につながる体制の整備を進めていこうという施策が提示され、運動部活動についても言及されている。③「合同部活」、④「外部指導員」、⑤「学校か地域か」に関わる議論である。

このように、移行期における部活動改革は、5つの取り組みと4つの議論が複雑に絡み合っていて進められている。しかしながら、これらの取り組みと議論は、必ずしも十分に関連しあっているわけではなく、また今日までの学校教育の置かれてきた状況や役割を幅広くふまえて展開しているものでもないように思われる。

つまり、いずれの議論も部活動に言及する際は、第一に、主として特別活動論や生徒指導論に則って、活動の自主性、技術や精神力の向上、授業場面とは異なる部活動内の人間関係の形成といったことを意義としても問題点としても論じており、部活動改革の方向性や功罪について学校教育の課題として論じる際もその範囲で論じるにとどまっている。第二に、運動部活動に多くみられるが、その活動本位に論じており、部活動改革の方向性や功罪や課題について、その活動でより高い成果や実績を得るためにはどのような活動のあり方が望ましいかという観点から論じるにとどまっている。このように、これまでの学校教育が担ってきている役割全般のなかで、理念的制度的に期待された役割にとどまらず、部活動がどのような機能を果たしてきたのかということ、それらの機能を今後どのようなかたちで果たしていこうとしているのかということは十分論じられていないのである。

しかし、前章までに得られた知見を考慮するならば、特別活動論や生徒指導論の視点、活動本意の議論にとどまらず、部活動改革に際して検討すべき学校教育の課題はさまざまにあると考えられる。そこで以下では、部活動改革に際しての学校教育の検討課題を教育社会学的な観点から導出するために、調査データからさまざまな状況下における生徒の意識と部活動改革との関係を分析していくことにする。

C 分析枠組み

調査では、前節で確認した部活動改革の取り組みのうち②～⑤について、資料VI-1のように、新たなあり方と従来のあり方とを対立させた選択肢をたてて、

どちらがいいか、生徒の意向を尋ねた。ただし、具体的な部活動改革の内容や現在部活動がおかれている状況を彼らが理解しているわけではないので、実際の取り組みから離れすぎない範囲で、考えやすいような条件設定をした。つまり、②「自校か他校か」と③「合同部活」は、部活動が制度的には任意参加になることや、経験的にこれまでも大会やコンクールに参加しないというケースはありえたことから、「部活動には参加しない」「大会やコンクールには参加しない」という選択肢を用意した。④「外部指導員」は、部活動の顧問の教師がこれまでも必ずしもその活動の専門家であったわけではないが、指導者に求めるのは専門性なのかどうかという判断軸がはっきりたつように、顧問の教師は当該活動を専門に指導できるものであるという条件を設定した。⑤「学校か地域か」は、自分の学校の部活動と居住地域の社会教育・社会体育の施設や団体のいずれでも、やりたい活動に参加できるというケースもありえ

るが、学校の活動としてなんらかの部活動に参加したいのか、場所はどこであれ、その活動をしたいのかという判断軸がはっきりたつように、自分の入っている部がなくなってしまったときにどうするかという条件を設定した。

これらの質問に対する回答傾向が、以下の7点における生徒の状況の違いによってどのように異なっているかをクロス分析によって検討する⁴⁾。

- i. 部活動への関わり方の違い。具体的には、第一に部活動にどのくらい力を入れているかという行動面でのコミットメント、第二にその活動の得意度、第三に部活動で一番楽しいこと、という3つの側面から検討する。
- ii. 部活動でやっているのと同じ活動を、中学以前または現在、居住地域の社会教育・社会体育の施設や団体でやった経験の有無による違い。
- iii. III章で検討した、学校の諸場面に対するコミットメ

資料VI-1 部活動改革に対する生徒の意向の調査項目

Q20 部活動について、次のような場合、あなたはどのようにしたいと思いますか。A~Dのそれぞれについて、あなたの意見に近い番号一つに○をつけてください。部活動に入っていない人も、もし入っていたらどう思うかを答えてください。

A. 自分のやりたい部活動が自分の中学校にない場合、他の中学校の部活動に参加できるとしたら、あなたはどのようにしますか。			
ア. 自分のやりたい部活動をするために他の学校の部活動に参加する	どちらかといえばア	部活動には参加しない	イ. 自分のやりたい部活動はあきらめて、自分の学校の他の部活動に参加する
	1.....	2.....	3.....
B. あなたの部が大会やコンクールに参加するのに必要な人数が足りない場合、あなたはどんな方法で大会やコンクールに参加しますか。			
ア. 他の中学校で、同じ部活動をやっている人たちと一つのチームをつくって参加する	どちらかといえばア	大会などには参加しない	イ. 自分の中学校で、ちがう部活動をやっている人たちに加わってもらって参加する
	1.....	2.....	3.....
C. あなたの部活動を専門に指導できる先生が学校にいない場合、あなたはだれに指導してもらいたいですか。			
ア. その活動の専門ではない、学校の先生に指導してもらう	どちらかといえばア	どちらかといえばイ	イ. 学校の先生ではない、その活動の専門の人に来てもらう
	1.....	2.....	
D. あなたの入っている部がなくなってしまう場合、あなたはどのようにしますか。			
ア. 他の部に入って、別の活動をする	どちらかといえばア	どちらかといえばイ	イ. 部には入らず、同じ活動をするために、学校外のスクールや教室に通う
	1.....	2.....	

ントのパターンによる違い。

- iv. IV章で検討した、部活仲間に注目した友人関係による違い。
- v. V章で検討した、保護者の経験や物質的豊かさといった出身家庭の環境による違い。
- vi. 学校所在地の地域性による違い。
- vii. 学校規模による違い。学校規模は、2001年版の全国学校総覧に基づいて生徒数を確認し、便宜的に、1学年3クラス100人程度以下の小規模校、6クラス200人程度以下の中規模校、それ以上の大規模校に分類した。

D 分析結果

1 自校か他校か(表Ⅵ-1)

まず、全体では、46.6%が自校の他の部活動への参加を、34.3%が他校のやりたい部活動への参加を志向していて、部活動は自分の学校でやるものという意向の方がやや優勢だ。

次に、部活動への関わり方の違いをみていくと、部活動に高コミットメントやその活動が得意な生徒は他校志向が高い。一方、部活動に中コミットメントやその活動が普通や苦手な生徒は自校志向で、低コミットメントや非加入の生徒は、部活動への不参加志向である。この結果から、他校の部活動への参加を認めようという取り組みは、一見すると、その活動に積極的な生徒に機会を提供するものとして評価できそうである。しかし、ここで注意したいのは、高コミットメントや得意であればその活動本位に部活動に関わっているとは限らないということである。練習や活動、試合やコンクールに部活動の楽しみを見出す生徒に比べて、部員とおしゃべりに楽しみを見出す生徒の他校志向は非常に低く、自校志向が高くなっているが、得意という生徒に絞ってみても同様の傾向がみられ⁵⁾、行動レベルではその活動に高い関わり方をしていても、部活動に対する主観的な意味づけ方は多様だということがわかる。このことから、学校の活動の場として部活動を捉えている生徒と、やりたい活動をやる場として部活動を捉えている生徒がいるということがいえよう。

クラスター分析による生徒類型別にみると、部活動へのコミットメントの高い全般型と部活・行事型では全体と似たような傾向だが、行事型と離脱型では不参加志向が強い。クラブ活動の部活代替制度のもとでは、主に放課後の活動である部活動への全員参加が問題視されることがあったが、彼らを全員参加に拘束さ

れていた層とみることができる。

友人関係では、部活仲間志向者と非部活仲間志向者の間にめだつた差はみられない。

学校所在地の地域別では、大都市部ほど他校志向が、郡部ほど自校志向がみられる。中小都市部や郡部では、近隣の中学校までの距離が大都市部に比べて遠い、一行政地域あたりの中学校数が少ないというような現実的な問題から、他校の部活動に参加するという選択肢自体が考えにくい場合があるのではないだろうか。

学校規模別では、大規模校ほど他校志向で、小規模校ほど自校志向となっている。この取り組みは、小規模校では生徒数や教員数の問題から提供できる部活動の種類が少ないため、他校の部活動への参加の機会を提供しようという発想だが、小規模校の生徒の方が自校志向が強いのである⁶⁾。

2 合同部活の是非(表Ⅵ-2)

まず、全体では、26.7%が合同部活を是認し、47.3%が否認している。ところで、質問のしかたは異なるものの、文部省体育局の諮問を受けて96年に実施された「運動部活動の在り方に関する調査」では、合同部活に肯定的だった運動部所属の中学生が46.5%だった。(研究協力者会議 1997)すでに合同部活を実施している地域や活動もあることを考えると、この取り組みを始めた意図と実際に活動をしている中学生の意向との間には乖離があるのではないだろうか⁷⁾。

次に、部活動への関わり方の違いをみていくと、コミットメントが高いほど、得意であるほど、合同部活を是認している。一方、コミットメントが低いほど、苦手であるほど、大会やコンクールへの不参加を志向している。また、練習や活動、試合やコンクールに楽しみを見出す生徒はほぼ同程度に是認する傾向がある一方で、部員とおしゃべりに楽しみを見出す生徒は不参加志向である。ここで注目すべきは、いずれの場合も否認する割合がほぼ半数で変わりがないということだ。つまり、合同部活の是非の間ではなく、大会やコンクールへの参加不参加の間に対立軸があるということだ。つまり、部員と一緒に練習や活動の延長線上に試合やコンクールを位置づけているということなのだろう。

クラスター分析による生徒類型別にみると、離脱型で不参加志向が強く、より多くの場面にコミットしていくに連れて是認する割合が若干ながら増えている。ひとつの学校内でも、さまざまな場面に関わり、多様な人間関係を構築しているほど、他校の部員と一緒に試合やコンクールに出ることに寛容になるのだろう。

表VI-1 自校か他校か

	部活コミット度			活動の得意度		部活の楽しさ		活動が得意な生徒の部活の楽しさ		クラスターパターン別			仲間と同じ部員			学校所在地			学校規模				
	全体	高	中	低	得意	普通	苦手	練習や活動そのもの	部員とおしゃべり	試合やコンクール	離脱型	行事・部活型	行事型	全般的型	ほかのひと	同じ部のひと	大都市	中都市	郡部	小規模	中規模	大規模	
		コミット	コミット	コミット	コミット																		
どちらかといえば他校	34.3	48.5	25.2	31.0	33.6	42.9	28.3	27.6	40.1	24.2	42.1	48.5	26.8	33.1	41.4	33.3	36.8	38.1	34.2	29.4	29.7	36.6	34.9
部活動には参加しない	17.9	8.0	17.8	34.3	40.9	10.8	17.4	21.3	10.2	20.8	9.9	7.4	27.1	11.1	23.8	22.0	13.8	19.5	17.6	17.0	13.9	14.9	20.7
どちらかといえば自校	46.6	43.5	57.0	34.7	25.5	46.2	54.3	51.0	49.7	55.0	48.0	45.7	46.2	50.0	43.1	44.7	49.4	42.4	48.2	53.6	56.3	48.5	44.5
合計	4.206	1.457	1.957	248	447	1.661	1.411	586	1.462	1.190	812	366	1.072	1.019	571	887	1.583	1.383	2.074	701	545	1.192	2.421
P値				.000**		.000**		.000**		.000**		.000**		.000**		.000**		.000**		.000**		.000**	.000**

※カイ2乗検定 ** : p<0.01, * : p<0.05
 ※全体の結果は無回答を含めた値なので和が100にならない。

表VI-2 合同部活

	部活コミット度			活動の得意度		部活の楽しさ		活動が得意な生徒の部活の楽しさ		クラスターパターン別			学校所在地			学校規模						
	全体	高	中	低	得意	普通	苦手	練習や活動そのもの	部員とおしゃべり	試合やコンクール	離脱型	行事・部活型	行事型	全般的型	大都市	中都市	郡部	小規模	中規模	大規模		
		コミット	コミット	コミット	コミット																	
どちらかといえば是	26.7	35.2	22.3	16.3	26.9	32.1	20.3	20.2	30.2	20.4	32.1	22.8	29.2	26.9	31.8	29.2	25.9	26.5	22.2	25.4	29.0	
大・コンクールには参加しない	24.6	15.7	27.4	45.3	32.3	18.4	34.4	19.7	35.3	30.6	16.6	35.3	17.1	23.2	17.4	25.7	23.4	28.1	24.4	22.9	26.1	
どちらかといえば非	47.3	49.1	50.3	38.4	40.8	49.5	45.3	50.1	49.0	49.0	51.4	41.9	53.7	49.8	50.8	45.1	50.7	45.4	53.3	51.6	44.9	
合計	4.206	1.455	1.950	245	446	1.655	1.408	585	1.464	1.182	808	366	1.071	1.013	568	885	2.070	698	544	1.191	2.410	
P値				.000**		.000**		.000**		.000**		.000**		.000**		.000**		.004**		.000**		.000**

※カイ2乗検定 ** : p<0.01, * : p<0.05
 ※全体の結果は無回答を含めた値なので和が100にならない。

学校所在地の地域別では、大都市部では是認の傾向が、中小都市部では否認の傾向が、郡部では不参加の傾向がみられる。大都市部では、近隣の中学校が近いため、ふだんから学校の枠を超えた人間関係が形成される可能性があって、是認の傾向がみられるのだろう。逆に郡部では、近隣の中学校が遠いため、合同する相手校をみつける機会が少なく、人数が足りなければ不参加という選択肢が強くなるのだろう。

学校規模別には、大規模校ほど是認し、小規模校ほど否認している。小規模校では部員の確保が難しく、大会に参加しにくいだろうという発想からこの取り組みはなされているが、それは大会参加が先にありきという発想ではないだろうか。しかし、先にみたように、彼らは、大会やコンクールは練習や活動の延長線上という捉え方をしており、小規模校ほど社会集団の凝集性が高いため、合同部活を否認する意向が強まると考えられるのである。

3 外部指導員の是非(表VI-3)

まず、全体では、25.1%が外部指導員を否認し、73.3%が是認している。これまでも、顧問の教師とは別に、技術面での指導をする専門家が学校の外部から参加しているケースはあったので、全般に抵抗が少なかったものと思われる。

次に、部活動への関わり方の違いをみていくと、コミットメントが高いほど、また得意であるほど、外部指導員を是認している。また部活動で一番楽しいことでは、「試合やコンクール」「練習や活動」「部員とのおしゃべり」の順で是認している。高い技術や判断が求められる場面へのコミットメントが強いほど指導者にその活動の専門性を求めており、コミットメントが低かったり部員とのおしゃべりに楽しみを見出したりしている場合、指導者にその活動の専門性以外のことも求めていることが分かる。なお、「自校か他校か」の志向別にみてみたところ、他校志向は是認し、自校志向は否認している。部活動への関わり方ともあわせて考えると、部活動に対する主観的な意味づけ方の違いがどのような指導者を求めるかにも影響していることが分かる。

さらに、中学入学以前や現在、学校以外でその活動をやっている生徒は、是認する傾向がある。これは、彼らが部活動にもその活動本位に関わろうとしているからだろう。

クラスター分析による生徒類型別にみると、部活動へのコミットメントの高い全般型と部活・行事型では是認の傾向があるが、行事型と離脱型では否認の傾向

がある。

出身家庭の環境では、その活動の経験のある保護者をもっているとは是認する傾向がある。保護者の経験の影響から活動に対する動機づけが高い分、指導者にその活動の専門性を求めるということだろう。

学校所在地の地域別では、大都市部ほど是認し、郡部ほど否認する傾向がある。これは、大都市の方がさまざまな立場の人が学校に関わってくる可能性が高く、今までにも外部の人が指導者として関わってきいたり、これから関わってくることにに対する抵抗感が低かったりするということだろう。

4 学校か地域か(表VI-4)

まず、全体では、61.5%が学校の他の部活動を志向し、36.8%がその活動のできる学校外のスクールや教室(以下、「地域」と表記)を志向している。条件設定によるバイアスは否定できないが、部活動は学校で行う活動であるという認識が全般に強いことが分かる。

次に、部活動への関わり方の違いをみていくと、高コミットメントと非加入だと、半数以上が地域を志向していて、中コミットメントや低コミットメントの生徒との意向の違いが大きい。非加入者の地域志向が高いのは、彼らのうち、現在地域の活動に参加している生徒で地域志向と回答した割合が66.2%に上っているためである。得意度も同様の傾向で、得意な生徒は地域志向が強いが、ふつうや苦手な生徒は学校志向である。

さらに、中学入学以前や現在、学校以外でその活動をやっている生徒は、地域志向が強く、当然のことながら、現在やっている場合は半数以上が地域志向である。

クラスター分析による生徒類型別にみると、行事型が学校志向である。これは、彼らが部活動に参加している場合でも、その活動本位の参加ではなく、友人と集まる場があるので参加しているという関わり方をしているためと考えられる。

出身家庭の環境では、その活動の経験のある保護者をもっている生徒は地域志向である。これは、彼らにとってその活動が部活動という学校内の活動から開かれているためだろう。また家庭の物質的豊かさが高いほど地域志向がみられる。このことを逆に考えれば、家庭に経済的にゆとりがなくても、学校の部活動がさまざまな活動の場を提供しており、それを彼らが享受することができるということになるだろう。

学校所在地の地域別では、大都市部ほど地域志向で、郡部ほど学校志向である。地域に社会教育や社会

表VI-3 外部指導員

	部活コミット度			活動の得意度		部活の楽しさ		自校か他校か		が学校高学年に学校外でその活動を		現在学校外でその活動を		クラスターパターン別		経験ある保護者		学校所在地							
	高コミット	中コミット	低コミット	得意	普通	苦手	練習や部員との活動のもの	部活動には参加しない	どちらか他校	やっていた	やっていた	やっていた	やっていた	行事情形	行事情形	行事情形	いる	いない	大都市	中小都市	郡部				
どちらかといえば非	25.1	18.1	29.0	41.9	25.6	19.7	33.0	18.4	17.5	31.0	29.3	22.6	26.7	19.4	26.4	29.7	20.4	29.9	22.3	21.7	26.7	22.4	26.1	29.6	
どちらかといえば是	73.3	81.9	71.0	58.1	74.4	80.3	67.0	81.6	82.5	69.0	70.7	77.4	73.3	80.6	73.6	70.3	79.6	70.1	77.7	78.3	73.3	77.6	73.9	70.4	
合計	4.206	1.454	1.954	241	441	1.658	1.404	585	1.437	739	1.951	1.062	2.455	505	3.146	1.066	1.014	569	888	913	2.696	1.374	2.065	699	
P 値			.000**		.000**		.000**		.000**		.000**		.010**		.001**		.000**		.002**		.002**		.001**		.001**

※カイ2乗検定 ** : p<0.01, * : p<0.05
 ※全体の結果は無回答を含めた値なので和が100にならない。

表VI-4 学校か地域か

	部活コミット度			活動の得意度		部活の楽しさ		が学校高学年に学校外でその活動を		現在学校外でその活動を		クラスターパターン別		経験ある保護者		家庭の物質的豊かさ		学校所在地						
	高コミット	中コミット	低コミット	得意	普通	苦手	練習や部員との活動のもの	部活動には参加しない	どちらか他校	やっていた	やっていた	やっていた	やっていた	行事情形	行事情形	行事情形	上	中	下	大都市	中小都市	郡部		
どちらかといえば学校	61.5	48.8	75.9	74.2	46.6	55.6	73.8	55.1	56.2	68.9	45.3	68.2	63.8	60.2	70.5	61.4	58.9	62.7	65.2	53.8	64.3	75.0	75.0	
どちらかといえば地域	36.8	51.2	24.1	25.8	53.4	44.4	26.2	44.9	43.8	31.1	54.7	31.8	36.2	39.8	29.5	38.6	41.1	37.3	34.8	46.2	35.7	25.0	25.0	
合計	4.206	1.456	1.939	244	444	1.652	1.402	580	1.462	1.179	806	1.067	2.440	566	884	884	1,026	1,740	1,365	1,378	2,057	696	696	
P 値			.000**		.000**		.000**		.000**		.000**		.000**		.000**		.007**		.000**		.000**		.000**	

※カイ2乗検定 ** : p<0.01, * : p<0.05
 ※全体の結果は無回答を含めた値なので和が100にならない。

体育の施設や団体がどれだけ用意されているかという問題と直結している。

E 部活動の移行期にあたっての学校教育の課題

以上の分析をふまえて、部活動の移行期にあたって学校教育が考慮すべき課題をいくつか指摘して、本章のまとめとしたい。

第一に、部活動へのコミットメントやその活動の得意度といった観点からは、現在の改革の方向性が支持されるが、一番楽しいことに注目すると、部活動に積極的に関わっていたとしても、彼らの部活動に対する主観的な意味づけには違いがあることが明らかになった。また、学校の諸場面に対するコミットメントのしかたの違いから、部活動への関わり方も多様であることが分かった。中学生が部活動に関わっていく際の目的は活動本位ばかりでなく、部活動の活動やその場を通して他に得ようとしているものがある場合もあって、そのことを考慮して改革の方向性を検討していく必要がある。

第二に、中学生の友人関係は、特定の集団単位で構成されている場合でも、その関係の結び方は多様であり、さらに所属する複数の集団が重なり合っていたり、それらの集団に対する意味づけ方が違ったりしている。活動本位に部活動に所属しているか否かという括り方のみで、中学生の部活動に対する意向を論じることはできない。とくに、従来のdomesticな学校空間から部活動が開放されるにあたっては、そのことで中学生が関わりうるさまざまな集団のなかでの位置づけやそれらへの意味づけがよりいっそう多様になる可能性があることをふまえて、今後の部活動のあり方や中学生の人間関係の方向性について検討する必要がある。

第三に、出身家庭の環境が違うことで、同じ部活動に所属していても、部活動がその活動に参加する初めての機会であったり、学校外で参加してきた経験があったりとさまざまであり、その違いによって部活動に対する意向も異なることが明らかになった。とくに学校で提供される部活動が、家庭環境によるスポーツ・文化的活動へのアクセスの機会の差を縮減する機能をもっていることから、学校スリム化論、教育自由化論の論調で家庭や地域にその役割を返すという方向性は、家庭環境の差を維持・拡大再生産させる危険性があることに十分考慮すべきである。

第四に、地域差や学校規模の違いについては、従来論じられてきた方向性とは異なる意向を示しているこ

とが明らかになった。活動本位の理念からすれば、それらの取り組みはたしかに地域差、学校規模に対応した取り組みといえるが、近隣の学校との距離の問題、社会教育・社会体育施設の整備といった社会基盤上の問題、社会集団の凝集性といった地域差や学校規模の違いが抱える要因から、逆に部活動やスポーツ・文化的活動へのアクセス機会の地域差や学校規模差を生み出す危険性があることに十分考慮すべきである。

以上を要するに、部活動改革には活動本位で取り組むのではなく、生徒の部活動への期待のしかたの違いをふまえたり、学校生活への関わり方や人間関係の築き方にどのような影響を及ぼす可能性があるかを考慮したりするなど、学校文化、生徒文化といった側面からも検討する必要がある。また家庭環境や地域性を考慮した場合、学校スリム化論や教育自由化論からのみ、家庭や地域との連携や移行を進めるのではなく、公共性という観点から学校がこれまで家庭や地域で果たしてきた役割を再評価したうえで進める必要がある。

<註>

- 1) 京都新聞2001年5月19日付朝刊にその報告の記事が掲載された。
- 2) 2000年2月24～25日に、文部省が各都道府県の運動部活動関係指導主事・教員を対象に開催した。
- 3) 議論の整理は、中井(2001)、研究協力者会議(1997)、文部省「スポーツ振興基本計画」、文部省「平成11年度運動部活動運営研究協議会配布資料」に依拠している。
- 4) 男女別、運動部文化部別、成績別にそれぞれの取り組みに対する意向の違いを検討してみたところ、「学校か地域か」を除き、有意な差がみられた。それじたい意味のある結果ではあるが、本章の目的からややずれるので、本章の分析では扱わない。なお、選択肢の設定がやや異なるものの、「自校か他校か」については、98年度調査をもとに藤田(2001)がより詳しい分析を行っているので参照してほしい。
- 5) 「高コミットメント」の生徒に限っても同様の傾向がみられた。
- 6) 地域性で統制しても、学校規模の違いによる志向の違いの傾向は残った。
- 7) 本調査での運動部所属者で、是認していたのは28.3%である。

VII おわりに

本稿では、われわれ研究グループが仮説的に提出している多元的学校文化モデルという捉え方から、全国7都府県の中学生を対象に実施した質問紙調査のデータに基づき、第一に、中学生の多様な学校への関わり方

や分化の様子とその規定因について検討した。第二に、それらの知見をふまえて、部活動の移行期にあたって検討すべき学校教育の課題を探った。最後に今後の課題を確認しておこう。

第一に、東京23区で行った98年度調査を受けて、我々の仮説が全国の他の地域でも適用できるかを検討すべく、今回の調査を行った。しかし、本稿には地域差に関する分析を十分に含めることはできなかった。今後地域差に関する考察を深める必要がある。第二に、部活動への関わり方は男女で大きく異なること、とくに多くの生徒が運動部活動に所属していることから、男女差を十分にふまえる必要があり、ジェンダー意識形成に関する調査も行ったが、本稿では十分考慮することができなかった。今後この点についての分析を行う必要がある。第三に、98年度調査を受けて観察調査を実施したように、質問紙調査では具体的に捉えきれない、生徒の学校への関わり方や分化の過程について、継続的な観察調査やインタビュー調査を行って、明らかにしていく必要がある。第四に、今回の調査は新教育課程の完全実施前に行ったもので、すべての中学生が新教育課程下で学校生活を送るようになる2004年度に、彼らの学校への関わり方や分化の様子について同様の質問紙調査を実施し比較検討をすることによって初めて今回の調査は一応の完結をみる。第五に、われわれ研究グループはこれまで中学生に注目して研究を進めてきたが、高校生についても調査分析を進める必要がある。なぜなら、推薦入試の普及や学科課程の多様化などによって、都市部を中心に学業成績を要因にするにとどまらない学校文化・進路選択の多様なありようは、高校段階でより偏差が大きくかつ可視的だからである。第六に、社会の変容やそれに伴う子どもの変容と絡めて、中学生の分化も変化しているのか、変化しているとすればそれはいかなる変化なのかを捉えるために、今回の調査結果を歴史的に相対化する必要がある。このように課題はまだ残されているが、ひとつひとつ実証研究を積み重ねて、多元的学校文化モデルの精緻化を進めていきたい。

付記 本稿は、平成13年度科学研究費補助金および平成13年度 笹川科学研究助成による研究成果の一部である。

《引用・参考文献》

- 中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議
1997 『運動部活動の在り方に関する調査研究報告書』文部省。
- Duck, Steve 1995 『フレンズ スキル社会の人間関係学』福村出版。
- 藤田英典 1991 『子ども・学校・社会』東京大学出版会。
- 藤田英典 2000 『市民社会と教育 - 新時代の教育改革・私案』世織書房。
- 藤田英典・宮島喬・秋永雄一・橋本健二・志水宏吉 1987 「文化の階層性と文化的再生産」『東京大学教育学部紀要』第27巻。
- 藤田英典・宮島喬・加藤隆雄・吉原恵子・定松文 1992 「文化の構造と再生産に関する実証的研究」『東京大学教育学部紀要』第32巻。
- 藤田武志 2001 「中学校部活動の機能に関する社会学的研究 - 東京都23区の事例を通して -」『学校教育研究』No.16。
- 羽田野慶子 2000 「中学生の運動・スポーツ参加とジェンダー意識 - 因子分析を手がかりに一」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第40巻 79-88頁。
- 外村近 1993 『実践からみた特別活動のあゆみ - 社会の変化と内容の変遷』教育開発研究所。
- 井手岡達朗・大下聖治・高橋章 1991 「親子間におけるスポーツ参与の影響 - 特に子供からの影響を中心に」『高崎経済大学論集』第34巻, 第3号。
- 荻谷剛彦 2001 『階層化日本と教育危機 - 不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂。
- 小浜逸郎 1985 『学校の現象学のために』大和書房。
- 糸野豊・池田勝・山口泰雄 1979 「バス解析によるスポーツ参与の分析」『筑波大学体育紀要』2。
- 耳塚寛明 1980 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』第35巻。
- 中井孝章 2001 「クラブ活動・部活動と人間形成」山口満編『新版 特別活動と人間形成』学文社。
- 西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英央・羽田野慶子 1999 「中学校生活と部活動に関する社会学的研究 - 東京23区内における質問紙調査を通して -」『東京大学教育学研究科紀要』第39巻。
- 西島央・矢野博之・荒川英央 2000 「中学生にとっての部活動の意味に関する実証的研究」第52回日本教育社会学会大会発表原稿。
- 小野田幹雄 1991 「教科外教育の歴史」酒向健・都築亨編『特別活動を学ぶ』福村出版。
- 志水宏吉 1987 「中等教育の社会学 - 研究動向の整理と展望 -」大阪教育大学教育学研究室編『教育学論集』第18号。
- 志水宏吉・徳田耕造編 1991 『よみがえれ公立中学 尼崎市立「南」中学校のエスノグラフィー』有信堂。
- 多々納秀雄・厨義弘 1980 「スポーツ参加の多変量解析(一) - 数量化理論第1類による要因分析 -」『健康科学』第2巻。
- 潮木守一・藤田英典・滝充・佐藤智美・川嶋太津夫・岩田弘三 1980 「中学校文化の構造分析 - 進路展望の形成過程 -」『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第27巻。

- 山田忠行 2000 「中学校におけるクラブ活動廃止の意味と今後のあり方」『全訂 特別活動読本』教育開発研究所。
- 山口泰雄・池田勝 1987 「スポーツの社会化」『体育の科学』vol.37、no.3。
- 山口満 2001 「戦後日本の学校教育における特別活動の変遷」山口満編『特別活動と人間形成』学文社。